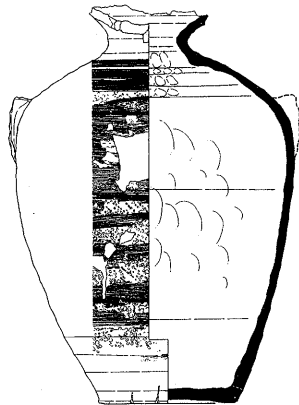


太宰府・佐野地区遺跡群 17

◇宮ノ本遺跡第10・10-2・14次調査◇



平成16年

太宰府市教育委員会

太宰府・佐野地区遺跡群 17

◇宮ノ本遺跡第10・10-2・14次調査◇

平成16年

太宰府市教育委員会

序

佐野地区遺跡群は本市の南西側を占め、大佐野、向佐野区で実施されている土地区画整理事業に伴う発掘調査により、その詳細が明らかになりつつあります。

今回の報告書は大字向佐野字宮ノ本で実施した調査の報告であり、本遺跡では太宰府西小学校や太宰府西中学校の建設に伴っておこなわれた調査によって、古墳や奈良・平安時代の太宰府の官人墓と考えられる火葬・土葬墓、須恵器を焼いた窯跡が発見されており、その内西小学校の中庭にあたる場所で発見された買地券を伴う墳墓は県の指定史跡として保存されております。

今回の調査でも古墳時代の集落や古代の墳墓が検出されており、遺跡の全体構成などを考察する上で貴重な成果を得ております。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

平成16年3月

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治

例言

1. 本書は太宰府市大字向佐野字宮ノ本で行われた発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N. (座標北) を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は各担当者および10-2次は井上由紀子が行った。
4. 遺構の空中写真撮影は空中写真企画 (代表壇陸夫) が行った。
5. 出土した金属製品の保存処理は下川可容子、安芸朋江、鈴木弘江が行った。
6. 遺物の実測およびトレースは担当者のほか山村信榮、森田レイ子、島純子、森若知子、長直信、阿部浩子、酒井三保子、松本理栄子、松隈里恵子、森部順子、デジタルトレースは相川寿美子が行った。
7. 遺物の写真撮影はフォトハウスおか (代表岡紀久夫) が行った。
8. 図の浄書は担当者のほか島純子、阿部浩子、酒井三保子、松本理栄子、松隈里恵子、森部順子が行った。
9. 本書に用いた分類は以下のとおり。
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV』(太宰府市の文化財 第49集) 2000年
須恵器・・・『宮ノ本遺跡II (窯跡編)』(太宰府市の文化財 第10集) 1992年
10. 本書の執筆者は目次に記載している。
11. 編集は、山村が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	1
II、調査体制	3
III、調査報告	
1、第10次調査	(中島恒次郎) … 5
(1) 調査に至る経過	5
(2) 基本土層	5
(3) 遺構	5
(4) 遺物	10
(5) 小結	15
2、第10-2次調査	(城戸康利・山村信榮) … 23
(1) 調査に至る経過	23
(2) 基本土層	23
(3) 遺構	23
(4) 遺物	28
(5) 小結	32
3、第14次調査	(井上信正) … 38
(1) 調査に至る経過	38
(2) 基本土層	38
(3) 遺構	39
(4) 遺物	40
(5) 小結	43
IV、結語	(山村) … 47

I、遺跡の位置と歴史

今回報告する一帯は太宰府市の南西に位置する宮ノ本丘陵の南裾に位置し、調査地南側には博多湾に注ぐ御笠川の源流の一つである大佐野川があり、宮ノ本丘陵裾を洗いながら北東に流下している。宮ノ本丘陵は福岡と佐賀県境にある脊振山塊から派生した峰が福岡平野から筑紫平野をつなぐ溝状の平地と接する端部にあたる。この溝状の平地は佐野地区の南約2Kmで分水嶺となっている。

大佐野川の北側は流れに沿って段丘状の地形が展開し、字前田から宮ノ本にかけては弥生後期から古墳時代にかけて集落が形成される。古墳時代前期には丘陵の尾根部に古墳が築造され、このうち宮ノ本12号墳の主体部から後漢代の獣帯鏡が出土している。古墳時代後期には春日市春日から大野城市牛頸、太宰府市大佐野にわたる丘陵地は牛頸古窯跡群と称される窯業地帯となり、この宮ノ本丘陵においても九州須恵器編年のⅤ期からⅦ期にわたる窯が諸所で営まれ、大宰府を中心とした地域に製品を供給している。奈良時代前期には丘陵裾を水城西門から筑紫野市二日市方面の大宰府条坊南端に向かう古代官道が敷設され、前田遺跡から日焼遺跡、島本遺跡で路面幅10m強の道路遺構が連続して検出されている。8世紀中頃以降には丘陵の各所において火葬骨壺が埋置され、一帯は大宰府官人の葬送地となり墳墓の造営は一部10世紀にまで継続している。丘陵頂部付近の宮ノ本1次調査区では買地券や唐式鏡を伴う厚葬墓が存在する。

古墳時代の集落は時代が下るに従い、大佐野川が開析して出来た谷部の口に当たる東の前田、雛川、フケ遺跡から徐々に尾崎、カヤノ遺跡といった西方に移動していく傾向が読み取れる。また、宮ノ本丘陵の古代墳墓は宮ノ本遺跡を中心に北は長浦遺跡、東は前田遺跡、南は殿城戸遺跡に至る南北1km、東西0.5Kmの範囲に展開し、火葬骨を容器に収める火葬墓は標高60m前後の高位な場所（宮1-4号、宮2-10号、宮7-1,ST025、宮9-ST020,030）からはじまり、時代が下るに従って低位面にまでおよび、9世紀中に土葬墓に変更されている。丘陵部では10世紀中には造墓活動が終わり、主体はさらに標高の低い前田遺跡に移行する。

今回の調査地は宮ノ本丘陵の南側に位置し、丘陵裾部における古墳時代の集落の一部や古代の墳墓などが確認されている。

Ⅱ、調査体制

(平成9/1997年度)・・・第10次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
調査	技術主査	狭川真一(9年10月1日～)
	主任技師	狭川真一(～9年9月30日)
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎(調査担当)
		井上信正
	技師	高橋学
		宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子
		森田レイ子

(平成10/1998年度)・・・第10-2、14次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主事	今村江利子
	嘱託	鈴木弘江
調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	城戸康利(10-2次調査担当)
		山村信榮
		中島恒次郎
		井上信正(14次調査担当)
	技師	高橋学
		宮崎亮一
	技師(嘱託)	下川可容子
		森田レイ子

(平成15/2003年度) 報告書発行

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信 (～6月30日)
		久保山元信 (7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信 (10月1日～)
	文化財調査係長	神原 稔 (～9月30日)
	調査係長	永尾彰朗 (10月1日～)
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利 (整理報告担当)
	技術主査	山村信榮 (整理報告担当)
		中島恒次郎 (整理報告担当)
	主任技師	井上信正 (整理報告担当)
		高橋 学
		宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁

発掘調査および整理に際して各方面の方々からご教示、ご指導を賜った。文末になったが記して謝意を表したい。

Ⅲ、調査報告

1. 宮ノ本遺跡 第10次調査

(1) 調査に至る経過

区画整理課との協議によって、工事工程との調整から調査へ入ることとなった。

調査期間は、平成9年9月8日～平成9年10月17日、開発対象面積は2,954㎡、調査面積は261㎡を測る。調査は中島恒次郎が担当した。

(2) 基本土層

調査対象地が、通称「宮ノ本丘陵」南側斜面にあり、旧耕作面に沿って遺跡が残存していたこともあり、二段にわたって調査を実施することにした。上段として実施した調査区の基本土層は、上位に耕作時の土が確認でき、その下位に黄茶色土が堆積しており、この土層から古墳時代のものと考えられる須恵器が出土している。さらにこの黄茶色土除去後に遺構が検出でき、検出できた遺構は、下位の暗茶色土層に切り込む形で確認できている。次いで下段として調査を行った区域では、やはり耕作土除去後、下位に暗茶色土が堆積しており、この土層から遺物が出土している。この暗茶色土除去後下位に黄褐色土に切り込む形で遺構が形成されていた。

遺構の残存状況は、上段より下段の方が顕著に残存していた。なお10ST001として検出した遺構は、上段にて遺構形成面として認定した面より上位で検出しており、平安時代には上段部分は顕著な遺構が展開せず、丘陵斜面になっていたものと考えられる。

(3) 遺構

検出できた遺構には、竪穴住居、火葬墓、土壙墓で、遺構の残存状況はいずれもあまり良くなかった。

a. 墓

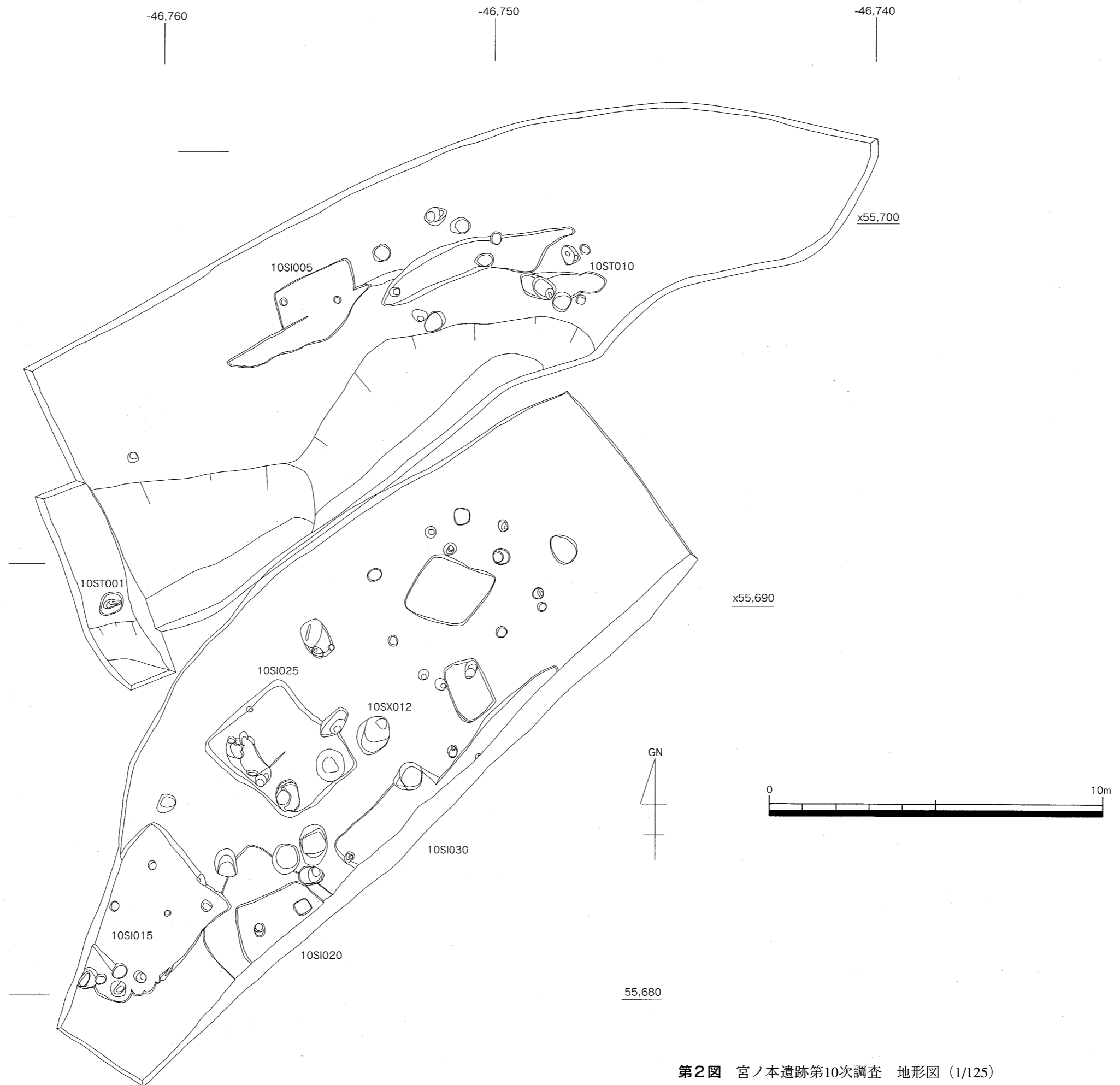
10ST001 (第3図、写真図版PL2-3,4、PL3-5)

上段西端において検出した蔵骨器で、他遺構検出標高と0.3mほどの高低差がある。これは表土除去時に先述した古墳期の住居形成面のみを視野に入れて調査を行っていたために生じた標高差で、採集された緑釉陶器皿の破片などは、この遺構に伴うものと考えられる。丘陵下位に埋置された蔵骨器で、短軸長0.61m、長軸長0.68mを測る隅丸長方形を呈する小穴に蔵骨器である須恵器壺が埋置されていた。須恵器壺は、埋置される小穴の底に接地しておらず、炭化物を多く含む黒色土が充填された小穴内に据えられる状況で確認している。検出できた小穴の深さは、約0.2m程度であり、上部を表土除去時に欠失してしまった関係から、本来の深さを知ることはできなかった。同一の小穴から緑釉陶器の皿(第5図-1～4)が破片として出土しており、蔵骨器として須恵器壺が使用され、破片化して採集された緑釉陶器皿が蓋として転用されていたものと考えられる。蔵骨器である須恵器壺内には、骨片とともに炭化物片が多く入れられていた。

なお遺構の立地環境としては、眺望はあまり良くなく、大宰府条坊跡の南半部分が見えるのみである。

10ST010 (第3図)

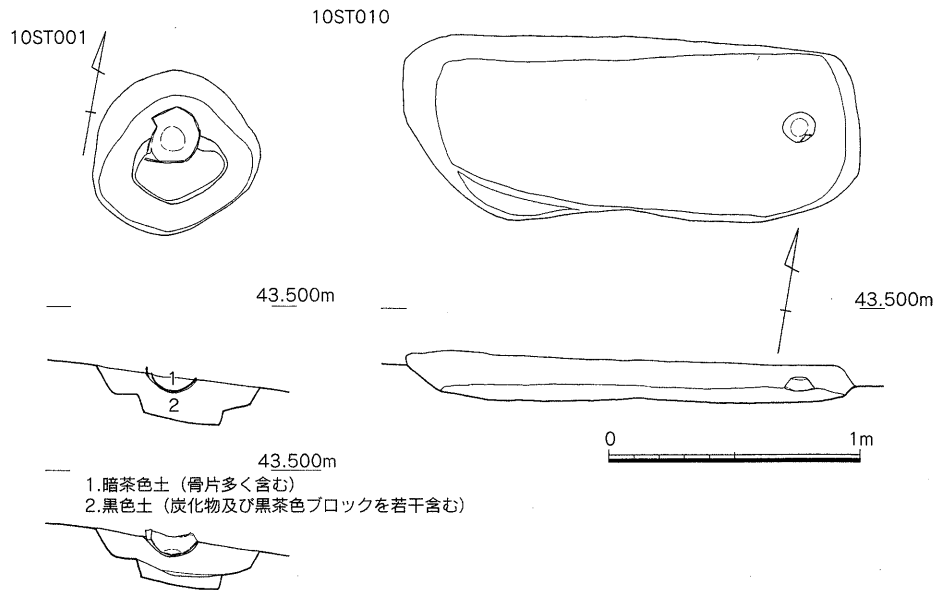
上段のほぼ中央部分に検出した長方形プランを呈する遺構で、長軸長1.81m、短軸長0.725mを測る。大略東西を長軸方向とし、東部においては本来の遺構形状を保持している可能性が高いが、南西部の形状が長方形の角を呈していないことから表土除去時の崩壊である可能性が残る。遺構内の堆積土は黒茶色の単一層のみでしか観察できなかったため、木棺の有無についての情報を得られていない。また釘も出土していないことから、棺が存在する可能性は極めて低いものと考えられる。



第2図 宮ノ本遺跡第10次調査 地形図 (1/125)

b. 竪穴住居

上段において、遺構検出時の形状が方形に近似していたため竪穴住居と認識し、10SI005として調査を行ったが、住居認定条件である柱穴の規則的な配置、安定した床面が認識できなかったことから、単なる地形の凹みと判断したものがある。同様な状況は、下段において検出した10SI030も同様で、調査時に観察できる属性からは竪穴住居とする根拠は記録できなかった。



第3図 10ST001・010 遺構実測図 (S=1/30)

10SI015 (第4図、写真図版PL6~8、PL9-18)

下段調査区北西隅にて検出した遺構で、長軸長3.63m、短軸長3.05mを測り、平面形が長方形を呈している。遺構床面にて柱穴と考えられる穴が4箇所確認できたが、遺構北側の穴には規則性があることから竪穴住居主柱穴と考えられるが、南側の穴には配置に規則性が観察できない。遺構南部中央において床面に赤色に変色した部分があり、被熱箇所と考えられる。竈などを想定する遺構が確認できないことから、上部構造については明らかではない。残存する深さは、良好な箇所で0.2mを測る。住居壁面の残存状況があまりよくないため、入り口が想定できる箇所も明らかにできなかった。

10SI020 (第4図)

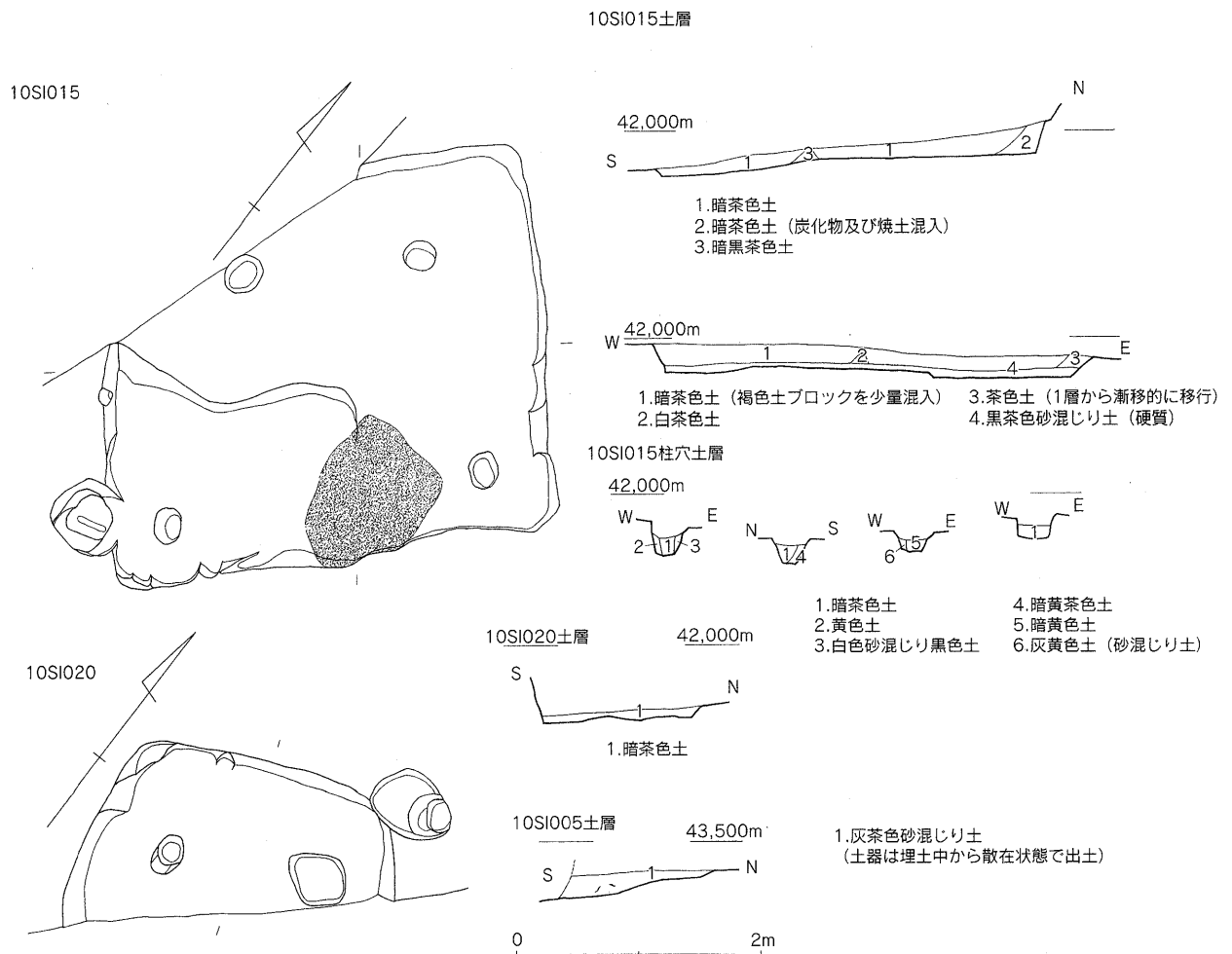
下段調査区南西部において検出した遺構で、遺構中央部以南が、旧耕作地の形状によって欠失している。残存長2.53mを測り、遺構床面に2箇所小穴を検出している。遺構全体形状において、この小穴に規則性が観察できることから、主柱穴と考えられる。検出した遺構の深さは0.1m程度と極めて残存状況が悪く、床面の構造についても観察が十分にできていない。遺構断ち割りによる床状況観察では、暗茶色の単一土で人為性を考慮できる根拠が提示できる状況ではなかった。

10SI025 (第2図)

下段調査区中央部にて検出した方形プランを有する遺構であったが、調査を進めると柱穴、床と考えられる硬化面などの住居認定のための諸属性が観察できなかった。したがって、竪穴住居とするには躊躇するが、遺構の計測値は平面計測値約3.0m前後、深さ0.1mを測る。

c. その他の遺構

上記遺構以外は、全て小穴を検出したが、その配置に規則性が看取できず性格を特定できる状況ではなかった。



第4図 住居跡遺構実測図 (S=1/60)

(4) 遺物

a. 臺出土遺物

10ST001 (第5図、写真図版PL10-20~26)

緑釉陶器

表土除去時に発見した遺構であったことから、遺構上半部分は重機にて欠失してしまった。その際、この遺構に伴うと考えられる遺物ならびに、遺構調査時の遺物を10ST001として報告する。したがって、蔵骨器の蓋に転用されたと解される緑釉陶器に二個体存在するような報告になってしまった。詳細は、調査時の所見が不明なだけに残念である。

椀 (1~4) 明暗の差はわずかにあるが、灰色を呈する胎土色調を有し、白色微粒子を少量混入している。釉色調はいずれも光沢のない明黄緑色を呈しており、同一産地の製品であると考えられる。色調ならびに胎土特徴、形態から防長産緑釉陶器と判断される。なお口縁部特徴が1は直線的であるのに対して、3はやや屈曲部を有するなど二個体存在していたかのような印象を受ける。同一個体中の差であるのかどうかは、細片化した資料では判断できない。

須恵器

甕 (5) 上半部が表土除去時に欠失してしまったことから、判然としない。体部外面には平行叩き痕跡をとどめ、内面には指頭圧痕跡を多く観察できる。焼成は良好であるが、還元がやや不良で瓦質化傾

向がある。中には火葬骨と考えられる骨および炭化物が収められていた。

10ST010 (第5図、写真図版PL10-27)

土師器

坏a (6) 口径11.8cmを測る坏で、内外面ともに器面磨耗のため底部切り離し処理等については不明である。形態および法量から大宰府Ⅶ期に分布中心を有する型式であると考えられる。

金属製品

鉄製釘 (7・8) 断面四角形を呈するもので、全形が残存していないことから長さを測定することはできなかった。明確な木質は残存していなかった。

b. 竪穴住居出土遺物

10SI005 (第6図、写真図版PL10-28~30)

弥生土器

甕 (1~3) 口縁部から体部上位の破片資料で、頸部「く」字形を有している。外面はいずれもハケによって調整されているが、1および3は内面の器面磨耗が著しく明確に観察できない。2は内面をハケによって調整されている。

壺 (4) 底部の破片資料で、全形は不明。内面は剥離しており、外面はハケ調整、安定した平底を呈している。

高坏 (5) 坏部の破片資料で、底部から屈曲して外方へ直線的に開くものである。坏上半部と底部の接合部分にハケ調整痕跡が観察でき、ハケによる器面調整後に体部を接合したことが分かる。

10SI015 (第6図)

出土位置は、以下のとおり。

10SI015壁際堆積層：6、10SI015b区：8、10SI015c区：7、10SI015d区：9・10、黒茶色砂層：11

須恵器

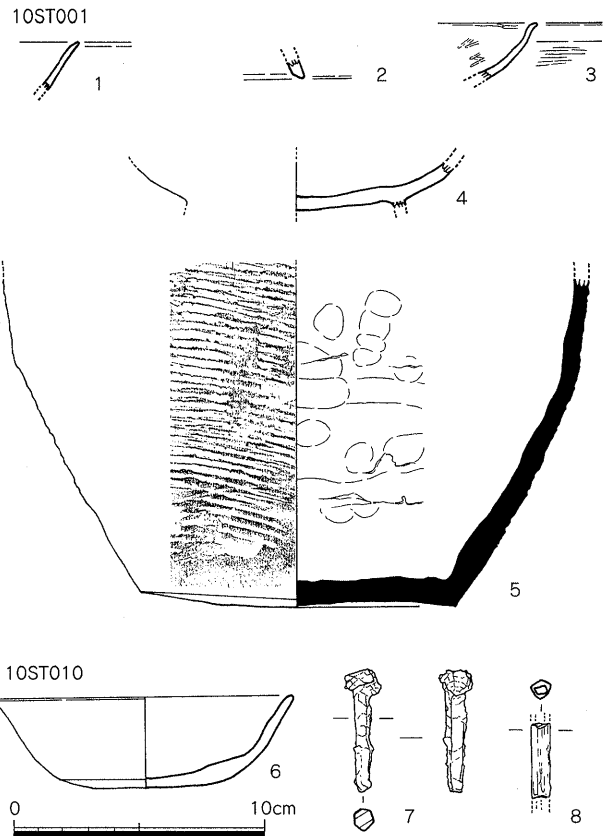
甕 (6) 口縁部の破片で、外面に凸帯を貼付したものである。

坏蓋 (7) 口縁部のみの破片で、口径を計測するまでには至っていない。内外面ともに回転ナデによって仕上げられており、口縁端部は丸い。

坏身 (8~10) 貼り付けによる口縁部成形を行ったもので、底部外面の調整については、資料限界から明らかにし難い。

石製品

石鏃 (11) 基部が片方欠損したもので、サヌカイト製の石鏃である。欠損しているが残存重量は2.5gを量る。



第5図 墓出土遺物実測図 (1/3)

c. その他の遺構出土遺物（第7図、写真図版PL10-32）

小穴他から出土した遺物で、各遺構ともに少量の出土であることから、製品ごとに説明を加える。

石製品

砥石（1） 砂岩製のもので欠損部1面を除いて全面を使用している。10SX003出土。

古式土師器

支脚（2） 支脚端部の破片資料で、外面横ナデ、内面横方向の削りによって仕上げている。10SX008出土。

甕（5） 口縁端部をつまみ上げる形状を有するもので、外面には平行叩き痕跡が観察できる。ただしその後の横ナデによって消し去られている箇所もある。内面は横方向のハケ。10SX011出土。

須恵器

坏蓋（3） 口縁部の破片資料で、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。口径については、不明。10SX009出土。

土師器

坏（4） 口縁部の破片資料で、口縁端部を内傾させる。10SX009出土。

弥生土器

甕（6・7） いずれも頸部「く」の字状に屈曲させるもので、6は内外面ともに横ナデによって仕上げている、10SX017出土。7は内外面ともにハケによって仕上げている、10SX018出土。

d. 土層出土遺物

表土（第7,8図、写真図版PL11-33~40）

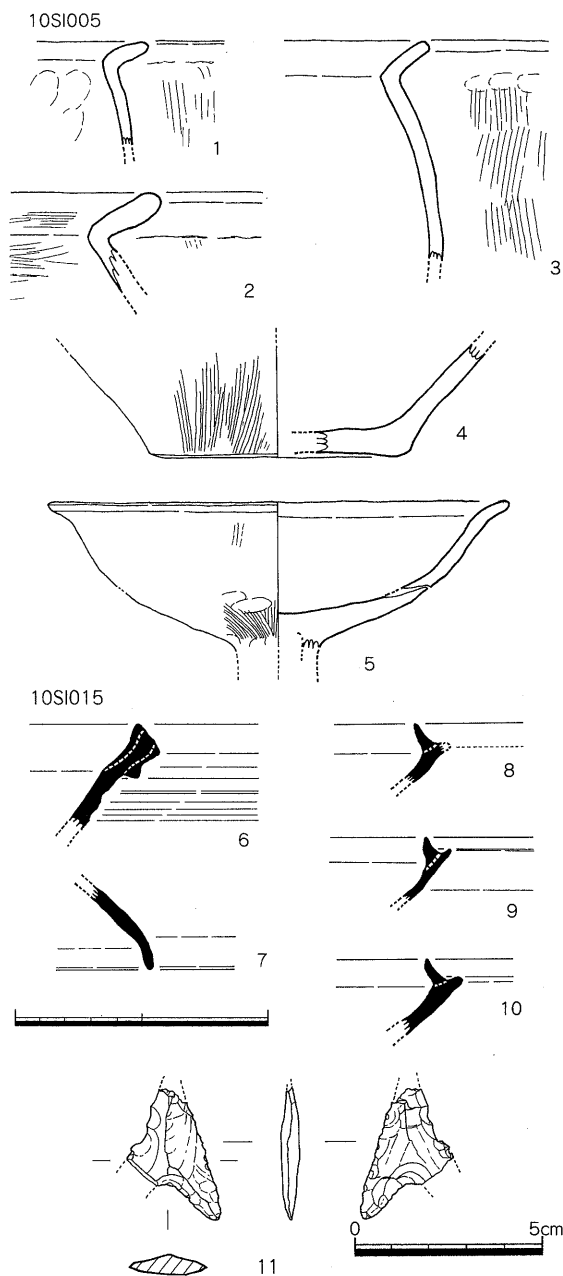
表土除去時に出土した遺物で、完形に近い資料もあり当該期の遺構を消し去った可能性もある。ただし、遺構形状が判然としなかったことも確かであり、丘陵上位からの流れ込みである可能性も捨てきれない。

須恵器

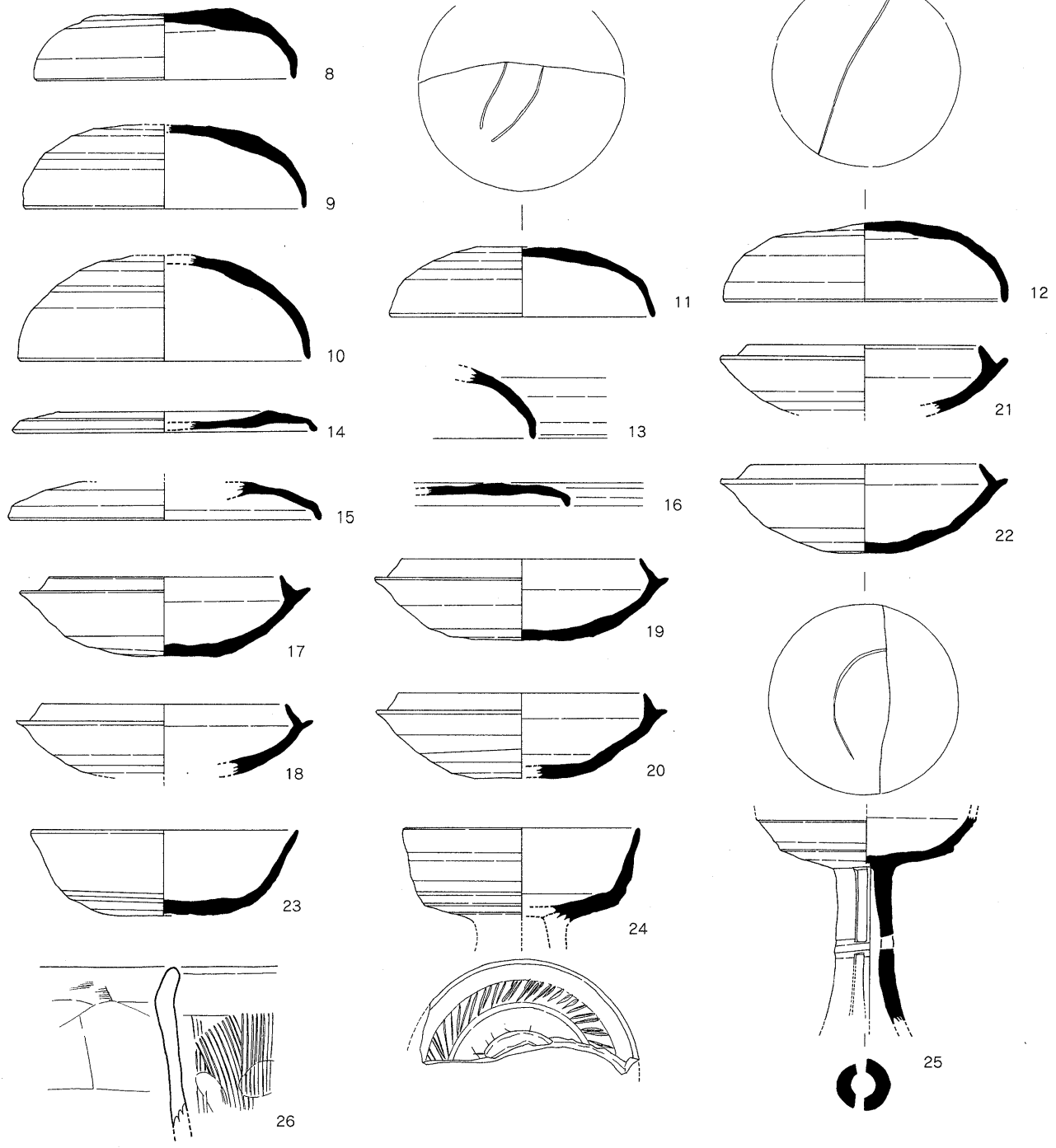
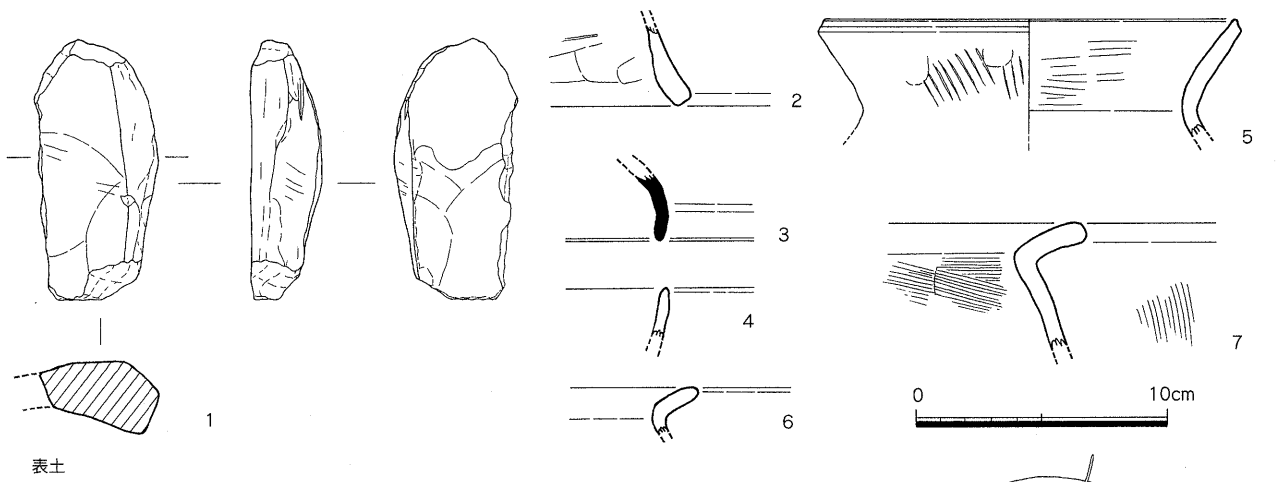
坏蓋（8~13） 口径12.6cm~14.0cmを測り、天井部外面全面を回転ヘラ削りするもの（9・12）と天井部外面の中心部分を削り残すもの（8・10・11）の二者がある。なお11・12は天井部外面に1条ないしは2条のヘラ記号が描かれる。

蓋3（14~16） つまみが貼付されているかどうかは不明。天井部外面は、天井部と口縁部の境界のみ回転ヘラ削りする14、天井部外面全面を回転ヘラ削りする15がある。16は器面磨耗のため不明。

坏身（17~22） いずれも貼り付けによる口縁部成形を行っており、底部外面中心を削り残すもので構成される。ただし底部中心部分を欠損する20については、明らかにし難い。口径は11.1cm~12.0cmを測る。



第6図 竪穴住居出土遺物実測図（1/3・1/2）



第7図 その他の遺構・表土出土遺物実測図 (1/3)

坏a (23) 底部から体部への移行が丸みをもち、外方へ直線的に開く体部形状を有している。底部外面は回転ヘラ切り後に粗い不定方向のナデによって仕上げられている。

高坏 (24・25) 両者とも長脚の高坏と考えられ、先述した坏身に脚が貼付される形式ではなく、平底の坏に脚が貼付されるものである。24は、坏部底部外面にハケ状原体による刺突文を描く。25は2方向に二段の長方形透かしを入れるものと推定できる。

甕 (27) 口縁部を外面に折り曲げるもので、外面に平行叩き痕跡をとどめている。

土師器

甕a (26・28) 頸部屈曲が緩やかで、短い口縁部を有するものである。体部外面はハケ、口縁部内外面は横ナデ、体部内面は横方向のヘラ削りによって仕上げられている。

甗 (29) 全形は明らかにし難いが、円筒形の形状を示す。外面は平行叩きの後粗いナデによって仕上げられ、内面は横方向のヘラ削りによって調整されている。甗基部は内外面ともに横ナデによって調整されている。

把手 (30) 甕に貼付されていたものと推定されるが、やや大ぶりの把手である。

黄茶色土 (第8図、写真図版PL11-41)

土師器

小皿a1 (31) 底部切り離しは糸切りと推定される小皿で、今次調査で最も新しい遺物となる。口径9.6cmを測る。平安後期のものと推定する。

暗茶色土 (第8図、写真図版PL11-42)

須恵器

坏蓋 (32・33) 口縁端部を丸く仕上げるもので、口縁部のみの破片であることから、詳細を明らかにし難い。

坏身 (34~37) いずれも貼り付けによって口縁部を成形するもので、35は底部外面を回転ヘラ削りする。口径が計測できる34と35は、12.0cm~12.8cmを測る。

弥生土器

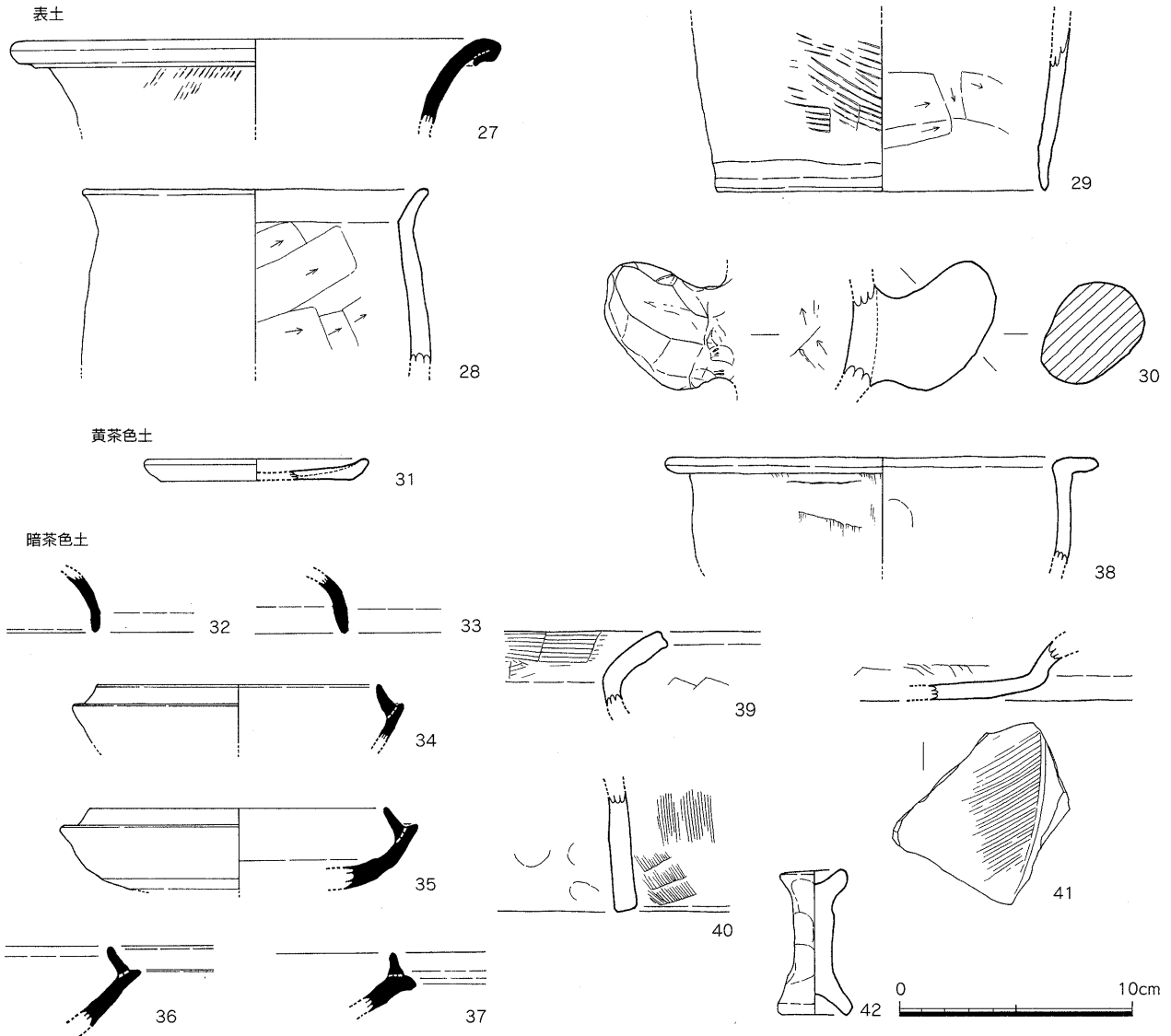
甕 (38) 頸部を逆「L」字形に曲げるもので外面はハケ、内面には指頭圧痕が観察できる。なお体部外面は灰黒色に変色している。

浅鉢 (41) 底部から明瞭な屈曲部を形成して外反する口縁部へと移行するもので、底部外面はハケによって調整されている。胎土特徴は粗い印象を受ける。

古式土師器

甕 (39) 口縁端部を面取りするもので、内面は横方向のハケ、外面は横方向のナデ痕跡が観察できる。

支脚 (40・42) 40は、やや大型の支脚と推定される。42は、小型の支脚で、全面に指頭圧痕が多く残存している。



第8図 土層出土遺物実測図 (1/3)

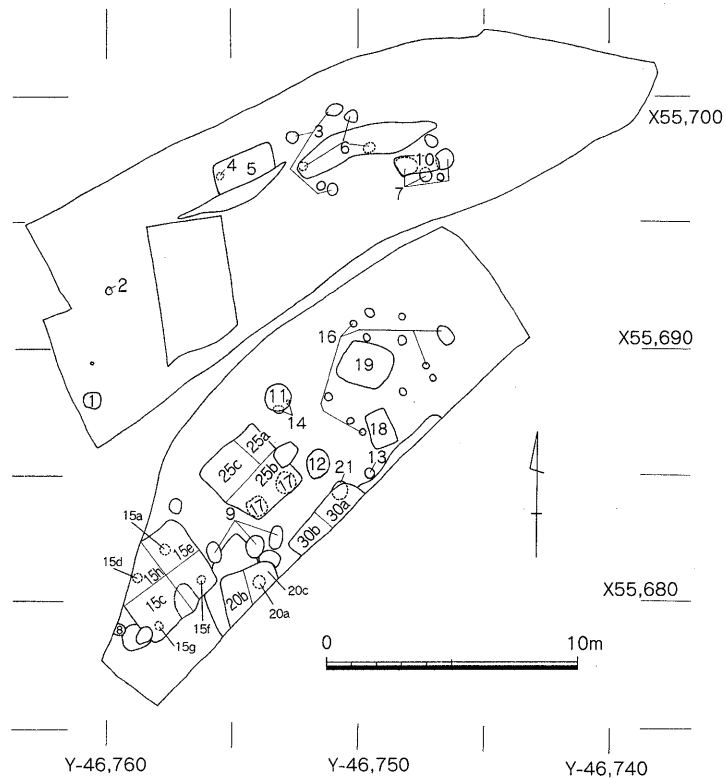
(5) 小結

今回報告した箇所南に過去調査を実施した第6次調査地があり、ここでは弥生時代後期終末から古墳時代初頭の竪穴住居が検出され、さらに平安時代前期の土壙墓が検出されており、今次調査の成果と整合している。

今次調査では、古代における墓制研究において火葬墓から遺体直埋葬としての木棺墓ないしは土壙墓への移行期の手がかりとして平安前期における二種の墓を検出できた。この差を単に時間軸上の差とするのか、被葬者の階層差に還元するのかは、遺物が語る時間軸上での位置付けからは判然としない。ただし、大宰府政庁を眺望できない箇所での造墓であり、前田遺跡周辺で検出される墓とは何らかの差が隠されているように思えるが、明らかにし難い。今次調査で検出した10ST010は、土師器1点のみを供献ないし副葬した墓で、6次調査地で検出した土壙墓では、平安中期に一般化する黒色土器、土師器の

組み合わせが既に見られるなど、被葬者の関係性を孕んでいると解することも可能かもしれない。

竪穴住居は、明確に住居構造を観察できる10SI015以外は、住居構造（柱、床、付帯施設など）が観察できないことから判然としない。10SI015は遺構内から出土した遺物から古墳時代後期、具体的には須恵器の特徴から神ノ前2号窯と同一時期のものと考えられ、住居南東隅に焼土面が観察されることから竈が置かれていたものと考えられる。今次調査のみからは貯蔵遺構のあり方を含めた集落の全体像は明らかにし難く、6次調査および周辺の調査成果を待って、解す方がよいものと判断される。



第9図 宮ノ本遺跡第10次調査 遺構略測図 (S=1/300)

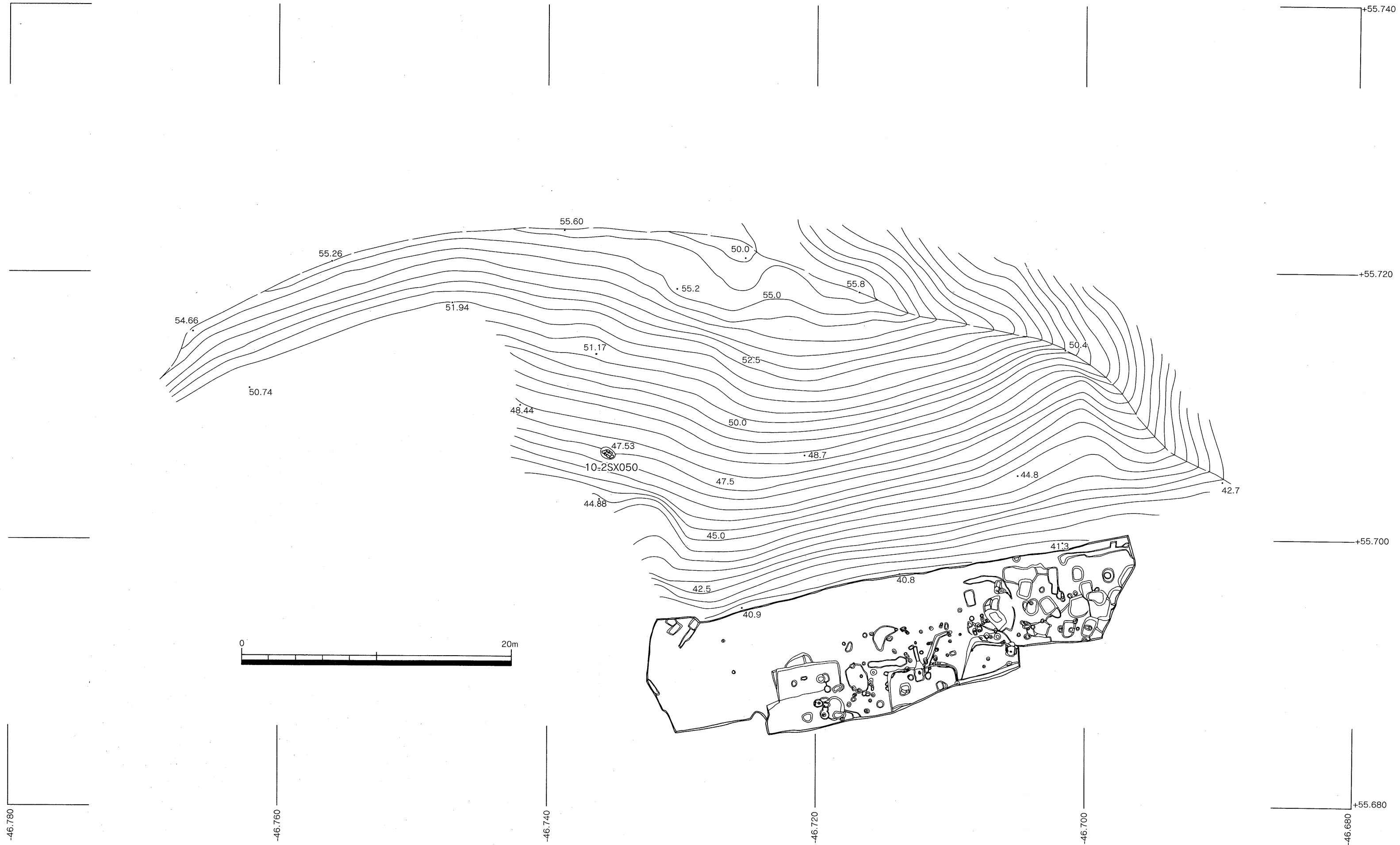
宮ノ本遺跡 第10次調査 遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	堆積土	遺構間関係	時 期	地区番号
1	10ST001	墓			平安前期	E10
2		小穴	茶灰色土		不明	G9
3		小穴	暗茶色土		古墳後期	H6
4		小穴	暗茶色土		不明	H7
5	10SI005	竪穴住居			古墳前期	H7
6		小穴群			古墳前期	B8
7		小穴群	暗茶色土		古墳後期	H6
8		小穴	茶黒色土		古墳前期	H5
9		小穴群	暗茶色土		古墳後期	B5
10	10ST010	木棺墓			平安前期	H5
11		小穴			古墳前期	C4
12	10SX012	小穴			古墳前期	B4
13		小穴	茶黒色土		不明	A4
14		小穴群	暗茶色土	S-14→S-11	古墳前期	C4
15	10SI015	竪穴住居			古墳後期	B7他
16		小穴群	暗茶色土		古墳	C3
17		小穴群	暗茶色土	S-17→S-25	古墳	B5
18		凹み			弥生	B5
19		凹み			古墳	C3
20	10SI020	竪穴住居×凹み			不明（平安後期？）	A6
21		小穴	暗茶色土	S-21→S-30	平安以降	A4
25	10SI025	竪穴住居×凹み			不明	B5他
30	10SI030	竪穴住居×凹み			古代？	A4

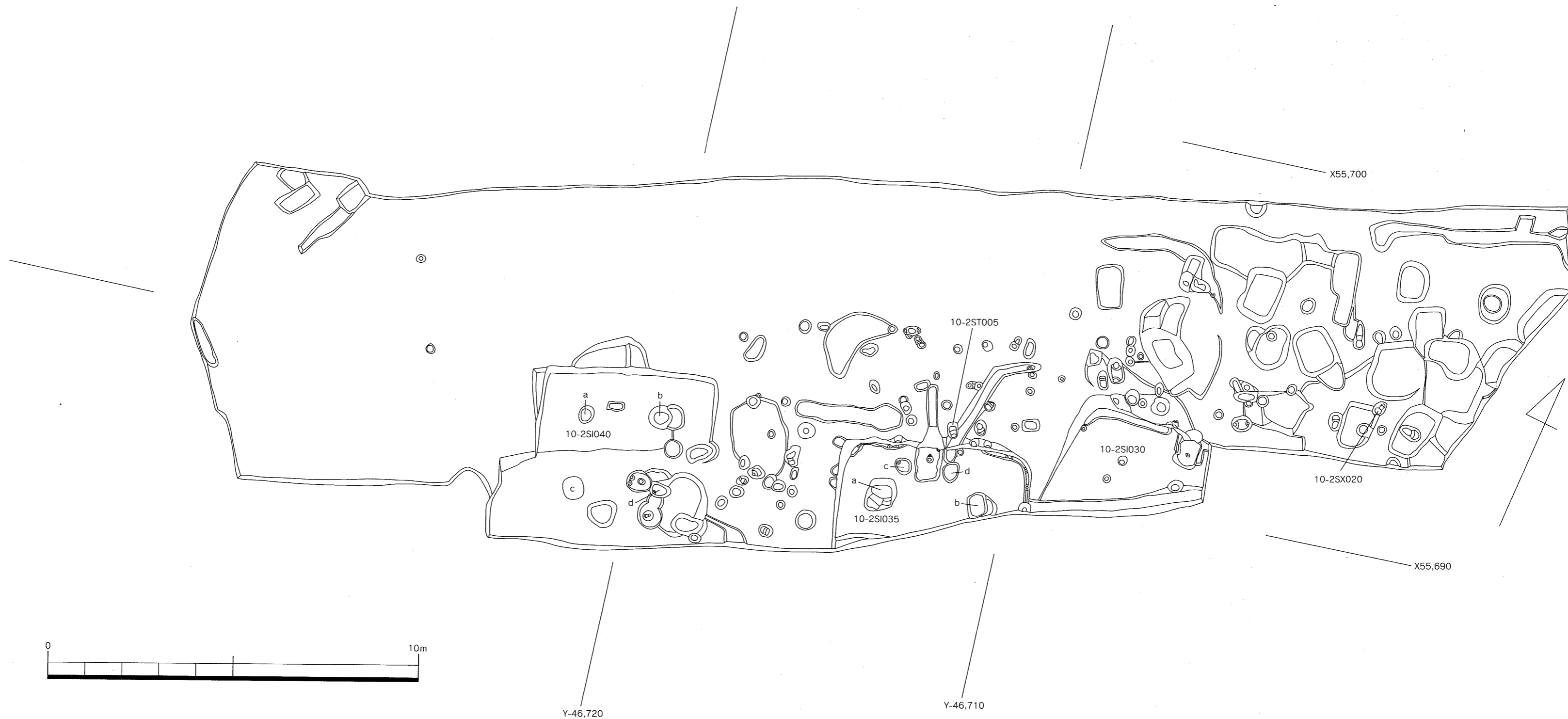
宮ノ本遺跡 第10次調査 出土遺物一覽表

S-1		
須 惠 器	壺、坏	
土 師 器	甕、坏	
緑 釉 陶 器	皿 (防長産)	
S-2		
土 師 器	煮沸具	
S-3		
須 惠 器	甕、壺	
土 師 器	甕	
石 製 品	砥石 (砂岩)	
金 属 製 品	鉄滓	
S-4		
土 師 器	甕	
S-5		
古 式 土 師 器	甕、高坏	
弥 生 土 器	壺 (中期)	
S-6		
古 式 土 師 器	甕	
S-7		
須 惠 器	甕、坏	
古 式 土 師 器	甕、壺	
金 属 製 品	刀子	
S-8		
古 式 土 師 器	甕	
S-9		
須 惠 器	坏、蓋	
古 式 土 師 器	甕、坏	
金 属 製 品	破片	
S-10		
須 惠 器	甕	
土 師 器	坏a	
古 式 土 師 器	甕	
金 属 製 品	鉄釘	
S-11		
古 式 土 師 器	壺、甕	
S-12		
古 式 土 師 器	高坏、甕、坏	
S-13		
土 師 器	破片	
S-14		
古 式 土 師 器	壺	
S-15		
須 惠 器	甕	
古 式 土 師 器	甕、供膳具	
S-15a		
須 惠 器	坏、甕	
古 式 土 師 器	甕	
弥 生 土 器	甕	
S-15a壁		
須 惠 器	甕	
S-15b		
須 惠 器	坏身	
古 式 土 師 器	甕	
白 磁	碗：II類 (I) 混入	
S-15c		
須 惠 器	坏蓋、甕	
土 師 器	碗c (混入)、坏、甕	
古 式 土 師 器	甕	
石 製 品	剥片 (サヌカイト)	

S-15d		
須 惠 器	壺、坏身	
古 式 土 師 器	甕	
S-15h		
古 式 土 師 器	甕	
S-15黒茶砂		
古 式 土 師 器	甕	
石 製 品	石磁 (サヌカイト)	
S-16		
古 式 土 師 器	甕、供膳具	
石 製 品	剥片 (黒曜石)	
S-17		
古 式 土 師 器	甕	
石 製 品	碟 (玄武岩)	
弥 生 土 器	甕 (後期)	
S-18		
弥 生 土 器	甕	
S-19		
古 式 土 師 器	甕	
S-20a		
須 惠 器	坏蓋	
古 式 土 師 器	甕	
金 属 製 品	鉄釘	
S-20b		
須 惠 器	坏c	
土 師 器	坏a、坏c	
黒 色 土 器 B	破片	
弥 生 土 器	甕	
S-20b		
土 師 器	丸底坏、甕	
S-21		
土 師 器	甕、供膳具	
S-25c		
古 式 土 師 器	甕	
石 製 品	剥片 (黒曜石)	
S-30		
土 師 器	破片	
S-30a		
須 惠 器	破片	
土 師 器	甕	
S-30b		
須 惠 器	壺	
土 師 器	供膳具	
表土		
須 惠 器	坏身、坏蓋 (神ノ前2号窯型式)、高坏、蓋3、甕	
古 式 土 師 器	甕、坏、把手、瓶	
白 磁	碗：IV類 (I)	
黄茶土		
須 惠 器	皿a、甕、蓋c3、壺、鉢a、坏c	
土 師 器	甕、坏c、把手、小皿a1 (イト)	
古 式 土 師 器	甕、蓋	
国 産 陶 器	破片 (近世~)	
弥 生 土 器	壺 (須II)、甕、支脚	
土 製 品	甕	
暗茶土		
須 惠 器	坏身、高坏、坏蓋、壺f、甕	
土 師 器	甕、碗c	
古 式 土 師 器	甕、高坏、瓶、支脚	
黒 色 土 器 B	破片	
石 製 品	剥片 (黒曜石)、滑石破片	
弥 生 土 器	甕	



第10図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 地形図 (1/250)



第11図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 遺構全体図 (S=1/100)

2. 宮ノ本遺跡 第10-2次調査

(1) 調査に至る経過

本調査は太宰府市大字向佐野201、202-1の山林と畑地（地目は山林）にあり、区画整理課との事前協議によって実施され、その調査期間は、平成10（1998）年4月20日～平成10年6月30日であり、開発対象面積は2,954㎡、調査面積は1,915㎡を測る。調査は城戸康利が担当し、整理報告は山村信榮が補助した。

調査は全体を重機により表土を除去し、平地（緩斜面）部分については遺構の輪郭が確認されるレベルまで掘り下げた後、手作業で再度、遺構検出をおこなった。丘陵部については手作業にて清掃をおこなったが、石組み遺構10-2SX050を検出するに止まった。

作図については、当初は任意座標にて調査を進め、調査終了後国土座標第II座標系により座標を振り込んだ。遺物取り上げ用の略図は1/100で作成し、遺構分布図および土層図等は1/20で記録した。丘陵部については航空写真測量により図化し、全体図は各データを編纂してデジタルトレースにより作成した。

(2) 基本土層

調査対象地は宮ノ本丘陵の先端部と沖積地に続く緩斜面に位置し、丘陵部は腐葉土を含む表土を除去した段階で風化した花崗岩の白黄色の土壤が現われた。緩斜面部は耕作地として使用されており、耕作土下には暗灰褐色の近世の遺物を含む層（S-1）と灰褐色土とした奈良時代の遺物包含層があり、その地山は締りのない黄色、橙褐色の花崗岩風化土の二次堆積土であり、その下に締った花崗岩風化土地盤が存在する。遺構は緩斜面の標高は約40mである。

(3) 遺構

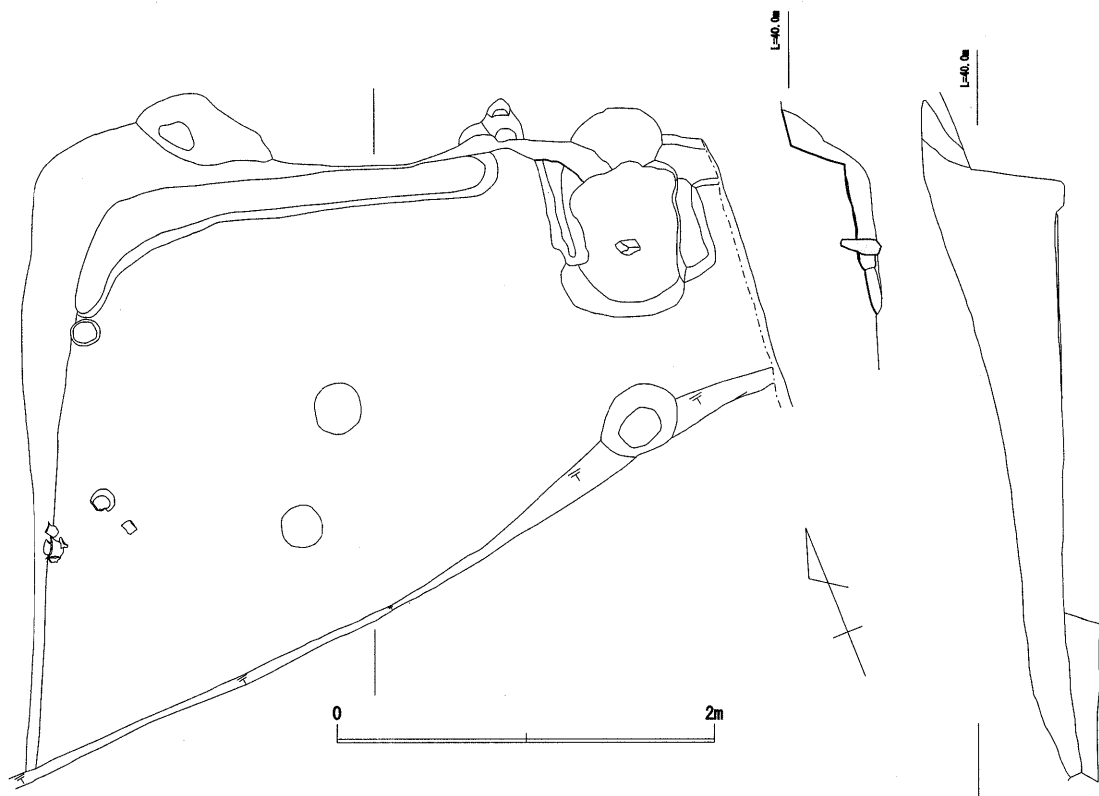
検出できた遺構は、竪穴住居、火葬墓、土壇、石組み遺構であり、遺構の残存状況はいずれも上部が削平された状況を示していた。調査区東側の土壇は風化していない骨片が見られるものもあり、近世以降の改葬を受けた土葬墓になるものが含まれると考えられた。

a. 竪穴住居

沖積地との境での緩斜面では6世紀代後半代の竪穴住居跡を3棟検出した。いずれも、南側が削平されているが丘陵側では約0.7mの深さがある。うち2棟では北側（丘陵側）にカマドを検出した。さらにそのうち1棟には約1.2mの煙道がとりついていた。

10-2SI030（第12図、写真図版PL13、14、15-50）

調査区の東南側で検出された方形プランの竪穴で、調査区外に遺構が延びている。検出された規模は南北3.5m、東西4.0m、北の壁際の深さ0.7mで、カマドは袖の外で東西幅約0.9m、北壁の法下端から窪みの南端まで0.9mを測る。底は床面より掘り込まれて8cmほど一段深く中央に方柱状の石の支柱が置かれたままで、袖は高さ15cmほどの帯状の粘土から成る。カマド正面奥は住居掘り方の壁が約20cmほど後退するが、煙道はこの検出レベルでは掘られていない。柱穴に係わると思われるピットが西側で2つ検出された。おのおのの深さは北側が床面から41cm、南のものは20cmの深さがある。北西隅の壁際に幅15cm、深さ5cmほどの溝がL字に掘られている。床面の西側際のほぼ床面上で九州須恵器編年IVA型式の須恵器坏（遺物図の1と2）と土師器小甕（遺物図4）が出土している。



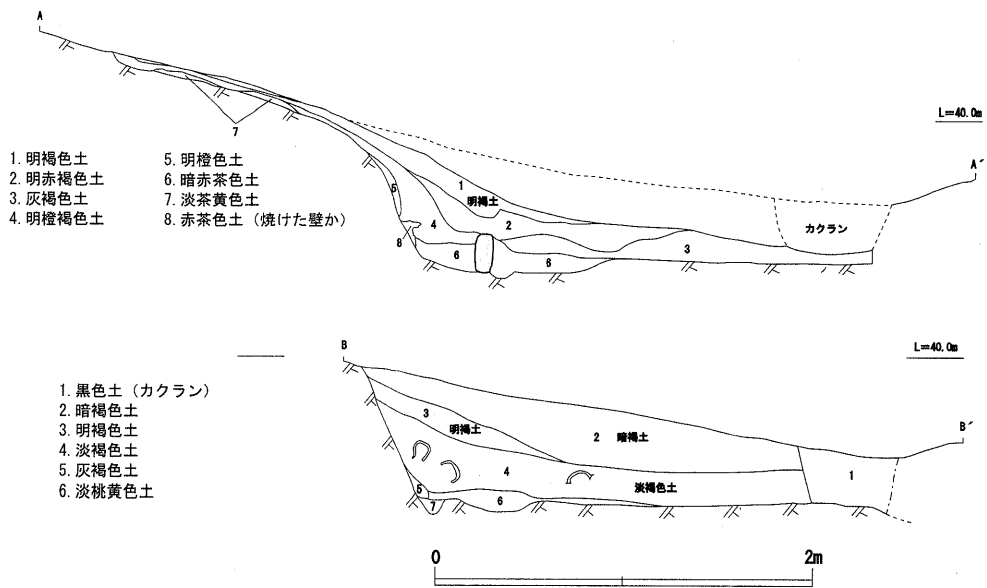
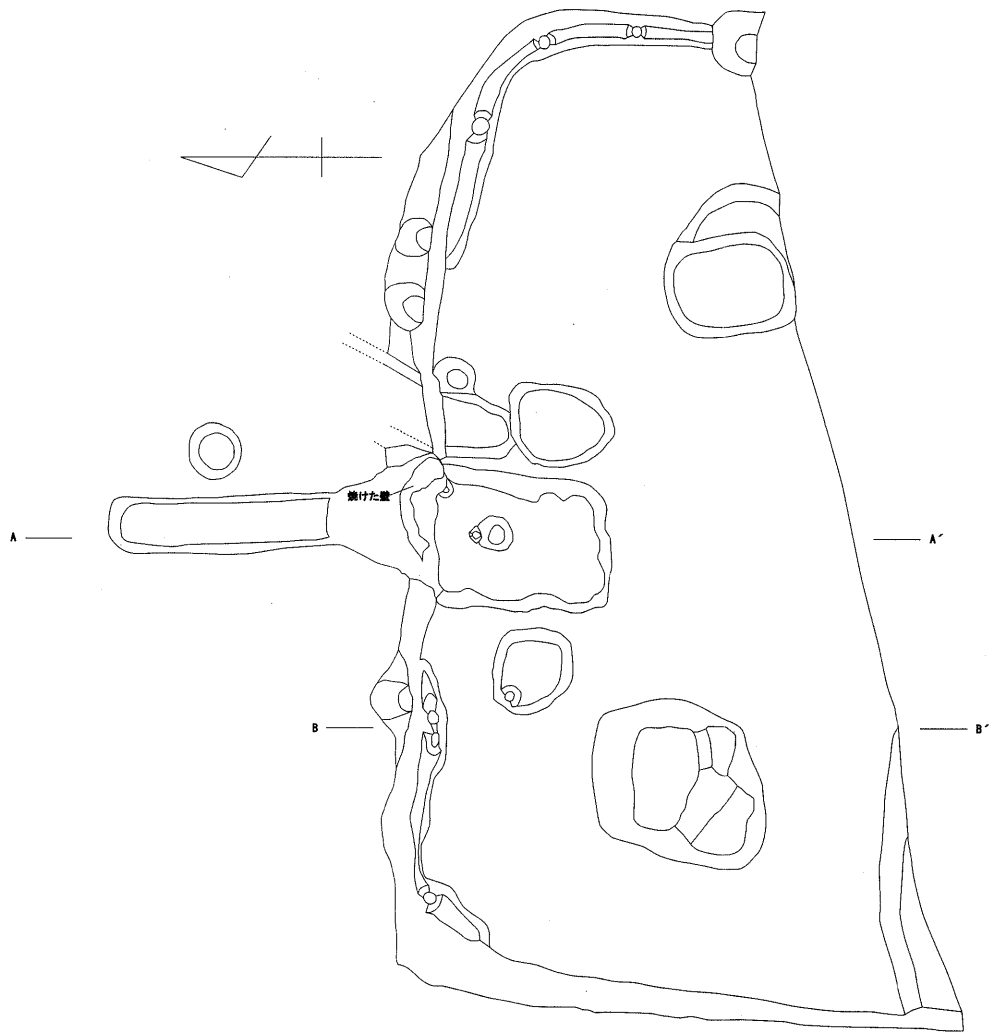
第12図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 SI030 実測図 (1/40)

10-2SI035 (第13図、写真図版PL15-51、PL16~19)

調査区の中央南側で検出された方形プランの竪穴で、調査区外に遺構が延びている。検出された規模は南北3.1m、東西5.4m、北の壁際の深さ0.7mで、屋根を支えた柱穴は方形に近い形状のもの二つが検出され、深さは西が0.65m、東が0.57mを測る。カマドは袖の造りつけはなく深さ9cmほどの掘り込みがあり、幅約0.7m、北壁の法下端から窪みの南端まで0.9mを測る。中央に深さ5cmの小ピットがあり、その横に方柱状の高さ10cmの石の支柱が置かれたままであった。北の壁際には幅0.5mにわたり帯状に焼けて硬化した茶褐色の土壌が張り付くように残存していた。壁面には土が塗られていた模様で、一部は硬化して残ったが大半は剥落した模様である。カマドの掘り込みの両脇には径約0.5m、深さ7cmほどの浅いピットが掘られている。カマド北側の住居掘り方外に長さ0.8m、深さ8cmほどの煙道が突き出している。北西、北東の床面角には深さ3cmほどの溝が掘られている。土壌概要は床を明褐色土が覆い、その上に北側から流入した暗褐色土によって最終的に掘り方が埋没した形となる。その上下両層から須恵器が出土しているが、坏については法量や手法から双方ともIV型式に帰属するものである。

10-2SI040 (第14図、写真図版PL20)

調査区の南西側で検出された方形プランの竪穴で、東西5.0m、南北2.4mが残存する。深さは北側の壁際で0.52m。床面に径0.6mほどの柱穴があり、その芯心間は2.0mを測る。北西角にプランの重複が見られ、途中で掘り直された可能性も考えられる。床面は硬化し、白色の花崗岩風化土が敷かれていた。掘り方埋土は単純で暗褐色土によって大半が埋没し、その上に地山土である暗黄褐色土が多少覆っている。出土した須恵器坏は他の住居から出土したものより古くII型式に属するものであり、このことから本調査で検出された住居跡としては本遺構が最も古いものとなる。



第13図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 SI035 実測図 (1/40)

b. 火葬墓

10-2ST005 (第15図、写真図版PL21-62,63)

古墳時代の遺構を覆うように奈良時代までの遺物を含む包含層(灰褐色土)が存在し、この包含層に9世紀代の火葬墓ST005が切り込んでいる。火葬墓は須恵器の長頸壺に火葬骨を入れている。この壺は下半部が埋められた当時の状態を留めているとみられるが、肩から上の部位は内部に陥没した形で遺存している。頸部を欠く須恵器の小甕片が骨容器の壺の外側を取り巻くように破片状態で一定量出土しており、逆位で壺に被せ蓋をしていたことも考えられる。しかし、土器としては時代的には骨容器の壺よりも古い(奈良時代の)様相であり、その関係性は判断しがたいものがある。検出できた遺構掘り方の平面形状は楕円形を呈し、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.2mが認知された。容器はこの掘り方中に口縁を地盤の高い北側に傾斜させた形で収めていた。埋土中から須恵器壺bの底部片も出土しているが、奈良時代の遺物包含層に帰属するのもであろう。容器内から検出された火葬骨は少量でとても全身の骨を納めたとは考えられない。

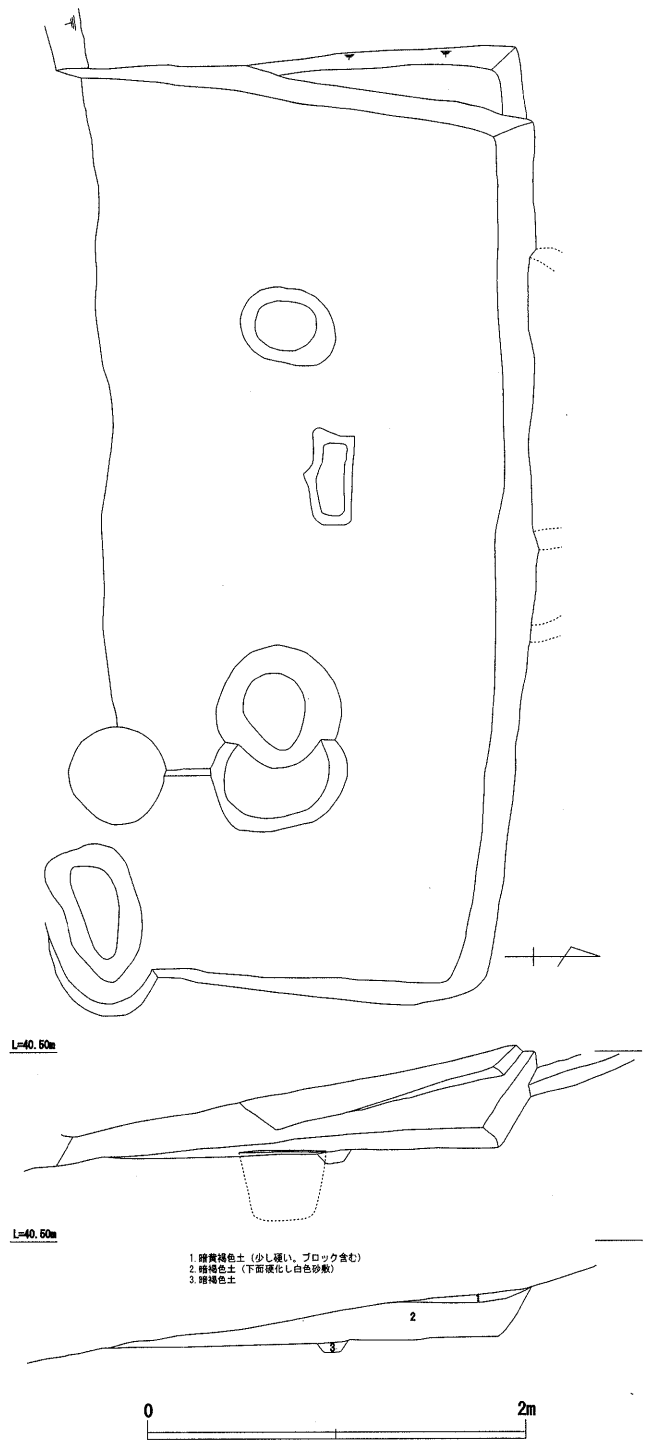
c. その他の遺構

10-2SX020 (第11図、写真図版PL21-64)

調査区南東隅に堆積した土壌S-1(近世以降の遺物包含層か)や近世以降の墓坑と思われるS-16を掘り下げる過程で検出されたピット状遺構で、下層にやや砂状の暗褐色土、上層に黒茶色土が堆積し、その層の境目ではほぼ完形の土師器坏d 2枚が折り重なり、皿aの破片と共に出土した。上層は近世以降の遺構に伴う可能性もあり、遺跡全体を覆う奈良時代の遺物包含層である灰褐色土から出土した遺物が、ある時点で再埋置されたことも考えられる。

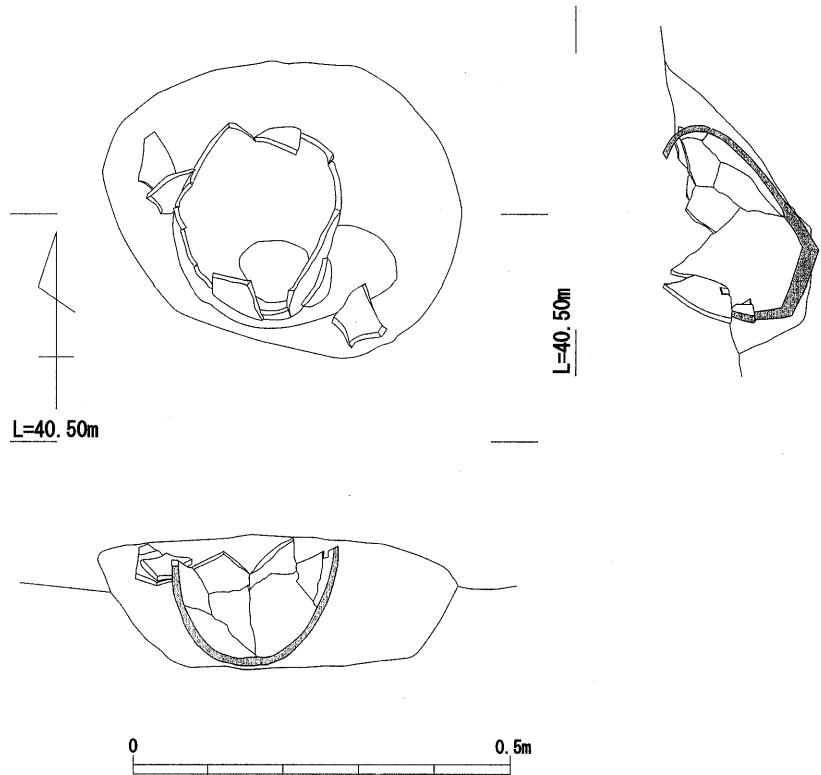
10-2SX050 (第16図、写真図版PL22)

長さ約1.3m、幅0.7mの楕円形の掘り方を持ち、扁平な花崗岩を使用した箱式石棺様の遺構を検出した。北側の側石は長さ0.6mの一枚の板状を呈すもので、南の側石は長さ0.6mと0.3mの二枚の板状、東



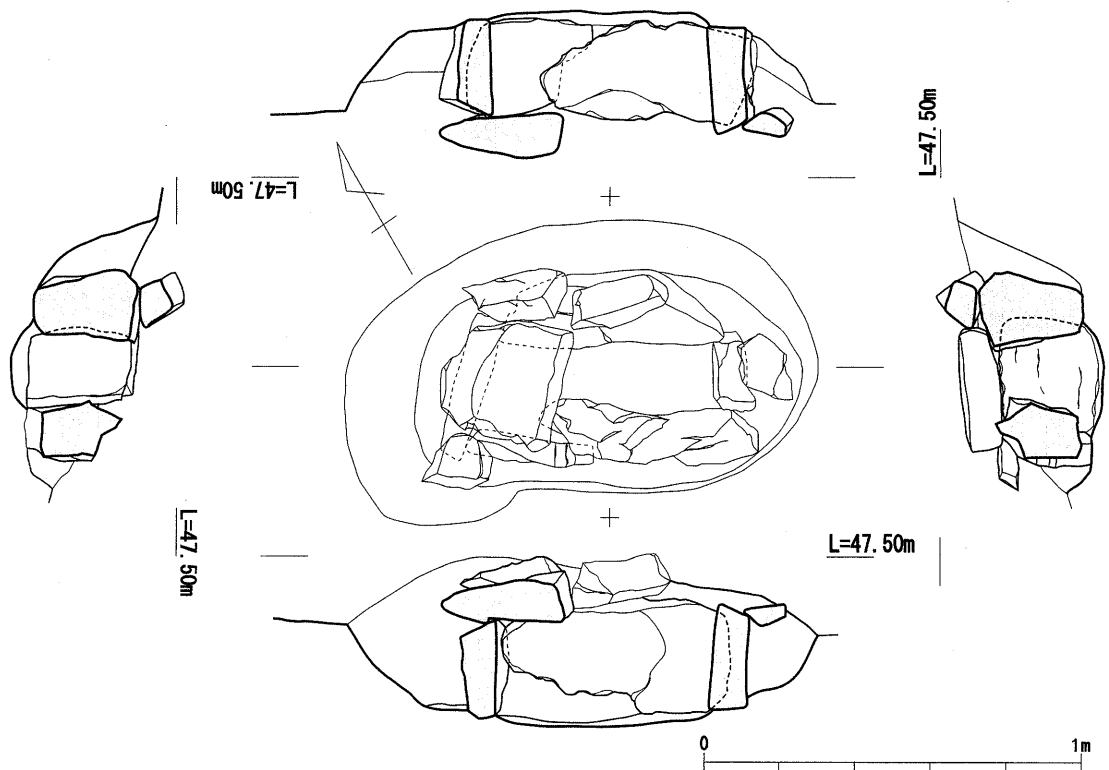
第14図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 SI040 実測図 (1/40)

小口は幅0.2mの板状のものが両側石に挟まれ、西小口は幅1.1mの板状のものが横から側石の口を塞ぐように立てられている。天井には0.34×0.24mの板状のものが側石と西小口の板石に乗る形で置かれており、東側には天井石がない状態であった。各石が原位置を動いていないとすれば、石の組み方は、掘り方中に側壁を立てた後に天井石を葺いたことになろう。石組みの内部は掘り方埋土に似た灰褐色の土壌で完全に埋まっていた。ほとんど遺物は残されていなかったが、IV型式の須恵器の坏身の小片が出土しており、古墳時代後期の所産と考えられる。



第15図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 ST005 実測図 (1/10)

構造や時期的な背景から、古墳埋葬施設の一形態である「小石室」と呼ばれる構造物である可能性が考えられる。西田巖の分類によれば本例は竪穴構造の小型の部類（I-口式）に相当し、同型式のものは小石室の中でも後出のもので宗像・福岡平野を中心に分布するという（西田巖「小石室から見た



第16図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 SX050 実測図 (1/20)

群集墳終末の諸相」『牟田裕二君追悼論集』1994年)。大半は後期群集墳中の一角で検出されており、この点では諸例とはことなる。また、側石が板石を立てた構造であり小口積みの技法を採らない点、磔床でない点においても、簡略化された感がある。石室内法は縦0.6m、横0.3mであり、埋葬施設であれば従来から指摘されているように骨だけを収めた再葬墓と思われる。

(4) 遺物

a. 住居跡出土遺物

10-2SI030 (第17図、写真図版PL23-68~70)

須恵器

蓋 (1) 1は口縁部が約1/4欠損するが、口径13.2cm、器高3.8cmの九州須恵器編年IV型式の坏蓋で、焼成は硬質であるが内面が酸化気味。天井部の回転ヘラケズリ時のロクロは右回転。天井部外面にヘラ記号が施される。

坏 (2・3) 2は口径11.8cm、受け部径14cm、高さ3.7cmのIV型式の坏身で、焼成は硬質で暗青灰色を呈す。天井部の回転ヘラケズリ時のロクロは左回転。3は1/6片からの復元で、口径10.9cm、受け部径13cm、高さ2.9cm以上のIV型式の坏身である。焼成は硬質で淡灰色を呈す。天井部の回転ヘラケズリ時のロクロは右回転。

土師器

甕 (4~6) 4は最大径が口縁端部にあり、口縁は短く屈曲している。内面は斜め上方向のケズリが施され、外面には縦方向のハケ目が残る。胎土は茶~橙褐色を呈し、口縁下に煤が付着している。口径は22cmに復元される。5は丸底で内面はケズリが施される。底部は若干フラットな形状を呈す。6は小型の丸底のもので、底は若干フラットで中央が多少窪む。外面はハケ目の上からナデが施される。内面はヘラケズリで底に成形時の粘土クズが固着する。

土製品

土玉 (7) 赤褐色から黄褐色を呈す焼成されたもので、上下2方向から穿孔する。球形ではなく多少いびつな形状を呈す。10-2SI035暗褐色土出土の土製勾玉との関連が考えられる。

10-2SI035明褐色土 (第17図、写真図版PL23-71~74)

須恵器

蓋 (8) 8は口縁部が約1/5欠損するが、口径14.2cm、器高4.4cmのIV型式の坏蓋で、焼成は硬質で青灰~黒灰色を呈す。天井部外側は手持ちのヘラケズリが施されるが、中央部は切り離れたままの未調整であり、窪んでいる。

坏 (9・10) 9は口径12.1cm、受け部径14.4cm、高さ4.2cmのIV型式の完形の坏身で、底部は右回転のヘラケズリを残すが、中央はヘラ切り時の挟りが深く残されている。焼成は硬質であるが灰茶色を呈し酸化気味である。10は口径11.8cm、受け部径14.4cm、高さ4.4cmのIV型式の坏身で、底部は右回転のヘラケズリを残す。口縁の1/3が欠損する。内底部に同心円の当て具痕跡がある。外面に平行線と斜線を組み合わせたヘラ記号がある。

土師器

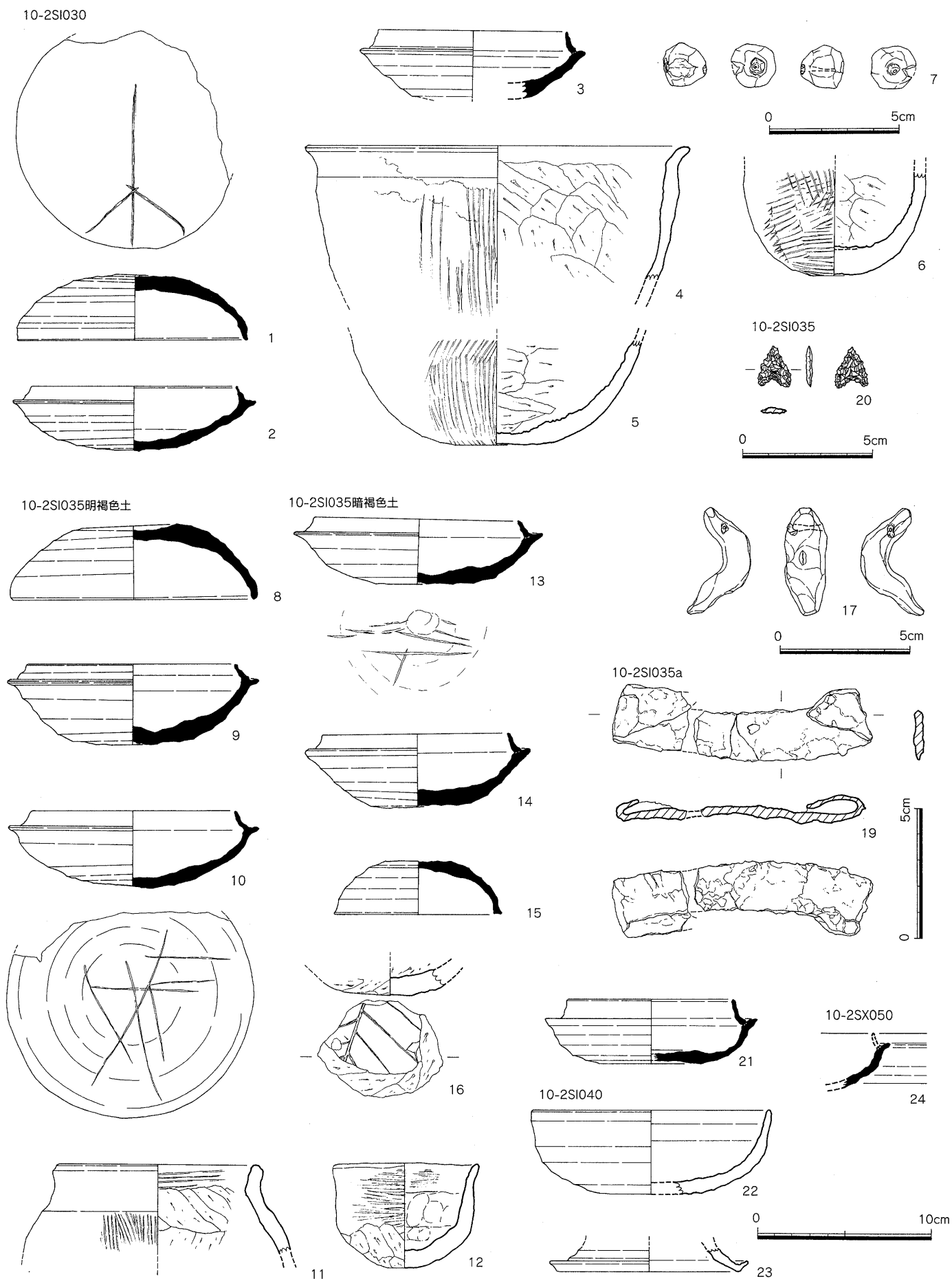
甕 (11) 口径が11.7cmに復元される小甕で、口縁は直立気味。淡橙色を呈し、内面は斜位のケズリが施される。

小坏 (12) 口径8.6cm、器高6cmに復元されるガイ呑状の形状を呈すもので、口縁部が1/4欠落していた。ユビオサエによる成形後、外面と内面口縁内側にハケ目が横方向に残される。外底部はその後に削られる。底は平らではない。

10-2SI035暗褐色土 (第17図、写真図版PL23-75~77、PL24-78~81)

須恵器

坏 (13・14) 13は口径11.7cm、受け部径14.3cm、高さ3.8cmのIV型式の完形の坏身で、底部は右回転のヘラケズリを残すが、中央はヘラ切り時の挟りが深く残されている。内面に1方向の強いナデが施さ



第17図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 出土遺物実測図 (1) (S=1/2・1/3)

れる。外底部に数条のヘラ記号が施される。焼成は硬質で黒灰色を呈す。14は口径10.8cm、受け部径13cm、高さ4.1cmの完形品で、底部外縁に右回転のヘラケズリを残すが、中央はヘラ切り時の挟りが深く残され、未調整である。硬質であるが茶色を呈し酸化気味の焼成であったと思われる。

壺蓋×坏蓋 (15) 口径9.7cm、器高1.3cmに復元され、容器の蓋と考えられるものである。断面形状はIV期の坏蓋に似ており、口縁端部は平たく、天上部は角のみ回転ヘラケズリが施されるが中央部は切り離しのままで未調整である。約1/6が残存し、焼成は硬質で淡青灰色を呈す。

土師器

器種不明 (16) 内面にケズリを有す容器の底部小片で、橙色を呈し、内面に煤が付着する。底部外面に葉脈の圧痕があり、外面もケズリによって調整される。当該地域ではこの時期の類例を聞かない。

土製品

勾玉 (17) く字形を呈す粘土塊で、先端の尖った鑿状の工具で二方向から穿孔される。形状から勾玉を写したものと考えられる。

金属製品

滓 (18) 大きな塊の表皮が欠落したかけら状のもので、ツララ状の突起を持つ。黒灰色、茶褐色の金属質の部位と多孔質で黒褐色の鉱物質の部位が混在する。

10-2SI035a (第17図)

金属器

手鎌 (19) 復元長10cm、身幅2cm、厚さ0.5cm。板状の両端を折り曲げたもので、平面形は多少の反りを持っている。折り曲げた部位には木質の残存は見られないが、形状から手鎌と見られる。当該地域のこの時期の出土例としては珍しい。

10-2SI035 (第17図、写真図版PL24-82)

石器

石鎌 (20) 黒曜石を素材とし基部に挟りが入る形状を呈し、両面ともに素材表面を残さず丁寧に調整を施している。表面は風化のため多少白色化している。加工が丁寧なことや風化が進んでいることから、縄文でも後晩期以前の所産と考えられる。

10-2SI040 (第17図、写真図版PL24-83)

須恵器

坏 (21) 口径9.9cm、受け部径12.2cm、高さ3.7cmに復元されるII型式の坏身で約1/3が残存する。底部は左回転のヘラケズリを残し、受け部の立ち上がりは上方に延び、全体形は箱型を呈す古い形状を持つ。体部外面にヘラ記号と思われる条線を残す。

土師器

坏 (22) 口径13.8cm、高さ4.8cmに復元される約1/3の破片である。明橙色を呈し体部外面に黒斑が残る。ハケ状工具は用いず、回転ナデによって成形された金属器を模倣した系譜の製品と考えられる。

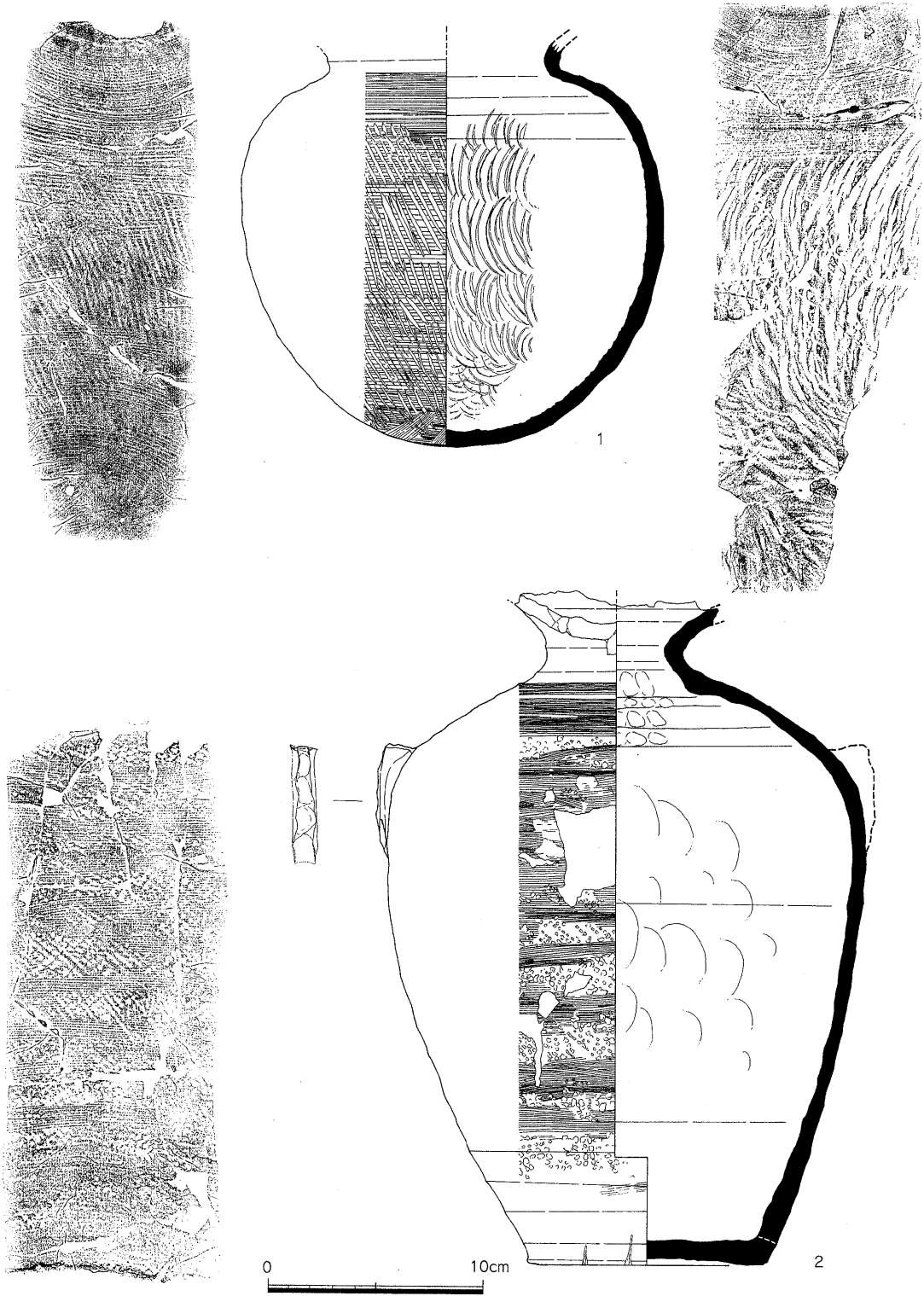
高坏 (23) 端部を屈曲させる裾部の高坏の1/2片で、11.4cmの径に復元される。精製された胎土で明橙色を呈す。22同様に回転ナデによって成形された製品である。

10-2SX050 (第17図、写真図版PL24-84,85)

須恵器

坏 (24) 体部の小片で受け部は欠損する。底部外面は右回りの回転ヘラケズリを施す。硬質で暗灰色を呈す。IV型式になるものと思われる。

10-2ST005



第18図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 出土遺物実測図 (1/3)

10-2ST005 (第18図、写真図版PL24-86,87)

須恵器

小甕 (1) 口縁部が欠失する。肩の張る玉葱形を呈し、外面は斜位の平行タタキの上に肩と底にカキ目を、内面には底部芯まで同心円の当て具痕を残す。硬質で暗青灰色を呈す。

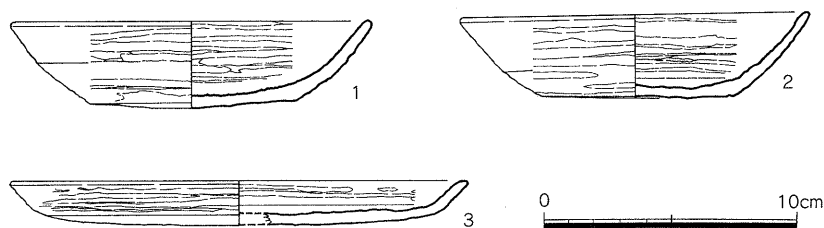
壺d (2) 口縁を失うが本来はラッパ状に開く二重口縁を持ち、肩が張り、胴が長く平底で、肩に粘土塊を貼り付けた縦方向の耳を持つ。外面は目の細かな正格子のタタキの上からカキ目が施される。カキ目は単位間で多少の間隔を保つ箇所がある。底部から体部には回転ヘラケズリが施される。底部角には二条の紐が食い込んだ痕跡が対面に見られる。内面には不定形な円形の当て具の痕跡が連続して残される。焼成は酸化した箇所はなく硬質で灰、淡青灰色を呈し、胎土には黒色の微粒子を多く含む。牛頸窯跡群ではこのような成形法を採るdタイプの壺は知られておらず、同様の属性を持つ製品が出土している肥後北部を中心とする、他所からの持込と考えられる。

10-2SX020 (第19図)

土師器

坏d (1・2) 橙褐色を呈す精製された胎土を持ち、回転ナデで成形され、底部と体部下位を回転ヘラケズリによって調整し、回転を利用したミガキaによって圏線を入れるような形で内外面にミガキを施している。1は口径14.4cm、器高3.4cm、底径8.2cmで口縁の1/2が欠損する。2は口径13.9cm、器高3.4cm、底径7.7cmでこれも口縁の1/3が欠損する。

皿a (3) 胎土、調整共に坏dと同様である。底部外面は中央に向かって凸形状を呈す。口径18.29cm、器高1.8cm、底径15.4cm。約1/6片である。



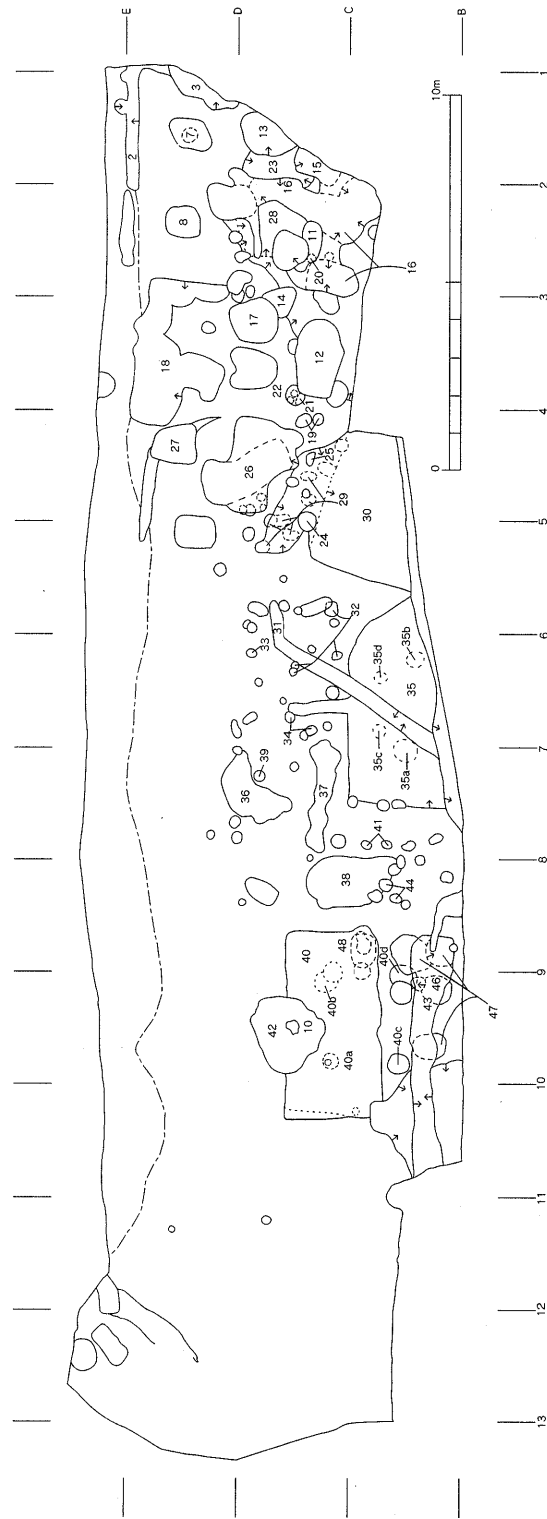
第19図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 SX020 実測図 (1/3)

(5) 小結

本10-2次調査では、古墳時代後期の集落に係わる竪穴住居3棟と再葬施設と思われる小石室、9世紀の火葬墓、などを検出した。同一傾斜面にある10次調査においても古墳時代後期の住居と平安前期の火葬墓が検出されており、この両時期においては同様の集落域や墳墓域であったことが理解される。

住居については10-2SI040ではカマドが検出されておらず、埋土から出土した土器は10-2SI030,035より時期的に古く、10-2SI030,035は10次調査と近い時代に埋没している。土器相としては10-2SI035のものが須恵器編年IV型式中でも若干新しい傾向を示している。

古墳時代の石組み10-2SX050は墳墓施設であれば、大佐野地区の谷部においては後期群集墳が発見されていない中では貴重な存在であり、同地域の集落変遷と共に葬送の場やあり方を考えるに当たり示唆的である。大宰府を望む丘陵地全般として古墳時代後期の古墳造営が低調である点は、大宰府出現前夜のこの地域の特色をあぶりだす一つの視点として重要である。



第20図 宮ノ本遺跡第10-2次調査 遺構略測図 (S=1/200)

宮ノ本遺跡 第10-2 次調査 遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	備考【先後関係など】	時期	地区番号
1		溜まり状		近世以降の遺物を含む		C3
2		カクラン				D1
3		落ち				D1
4		包含層？				C2
5	10-2ST005	火葬墓		壺埋納、灰褐色土に切り込む	9c	C6
6		小穴				C2
8		方形小穴	明褐色土			D2
9		包含層			弥生	C2
10		包含層の一部？	周辺の土色と変わらないが、須恵器大甕が集中。神の前2号と同じ。			C9
11		小穴	黒っぽい			C2
12		土坑	暗灰土	骨出土		C3
13		土坑				C1
14		土坑	暗灰土	骨出土		C1
15		土坑	単一色	人骨出土		C1
16		墓穴				C2
17		墓穴				C3
18		墓穴				D3
19		小穴群				C4
20	10-2SX020	小穴		s-1と関係あり。土器埋納		C2
21		小穴		21→22		C3
22		小穴	暗褐色土			C3
23		溜り		抜き跡？		C1
24		小穴	炭入り。下に暗褐色土あり。			C5
25		包含層	灰褐色土			C4
26		土坑	明褐色土	墓穴とは違うよう		C4
27		墓穴				D4
28		墓穴	暗褐色土			C2
29		小穴群		s-25の下		C4
30	10-2SI030	竪穴住居		北側に竈あり。	古墳後期	C5
31		溝？				C5
32		小穴群			奈良	C6
33		小穴			奈良	C6
34		小穴群			奈良	C6
35	10-2SI035	竪穴住居		長い煙道らしきものあり	古墳後期	B6
36		溜り	暗褐色土			C7
37		溜り	黄褐色土			C7
38		溜り				C8
39		小穴				C7
40	10-2SI040	竪穴住居	暗褐色土	竈あり。東向か。	古墳後期	C9
41		小穴群				B7
42		溜り	暗茶土。S-10と同一のものと考えられる。			C9
43		溜り	黒色フワフワ土。耕土に近い。			B9
44		小穴群				B8
46		小穴	暗褐色土	43←46		B9
47		小穴群		43←47		B9
48		小穴		40←48。焼土下で検出。		B6
50	10-2SX050	斜面の石組			古墳後期	

宮ノ本遺跡 第10-2 次調査 出土遺物一覧表 (1)

S-1

土 師 器	坏a、坏b、皿a、皿b、破片
肥前系陶磁器	坏(内面軸刺ぎ)
弥生土器	甕

S-2

須 惠 器	坏×碗c
土 師 器	破片

S-3

土 師 器	破片
白 磁	碗：分類不明破片

S-4

土 師 器	小皿a、坏a
黒色土器A	破片
弥生土器	壺、甕破片(後期前)

S-5

須 惠 器	壺(2個体)
-------	--------

S-6

土 師 器	甕破片
-------	-----

S-9

土 師 器	破片
-------	----

S-10

須 惠 器	大甕(古墳、神ノ前)、壺(?、赤焼け)
-------	---------------------

S-11

須 惠 器	甕×壺
土 師 器	坏、壺、破片
弥生土器	器台×支脚、破片

S-12

須 惠 器	破片
土 師 器	坏d
弥生土器	破片

S-13

須 惠 器	坏a1
土 師 器	甕破片、小丸底壺、坏a

S-15

須 惠 器	破片
土 師 器	破片
弥生土器	破片

S-16

須 惠 器	破片(壺、甕)
土 師 器	高坏破片、坏d、壺
弥生土器	壺(二重口縁)、器台

S-17

土 師 器	破片、小皿a(イト)
弥生土器	破片

S-18

弥生土器	破片
------	----

S-19

土 師 器	破片
-------	----

S-20

土 師 器	坏d、皿a、破片
-------	----------

S-21

土 師 器	大甕c4
-------	------

S-22

土 師 器	破片
-------	----

S-23

須 惠 器	破片
土 師 器	破片
弥生土器	甕

S-23

土 師 器	坏×碗c、破片
-------	---------

S-25

須 惠 器	破片、甕×壺、坏×碗c
土 師 器	甕
弥生土器	破片

S-26

土 師 器	破片
-------	----

S-27

須 惠 器	破片
土 師 器	破片

S-28

弥生土器	破片、甕
------	------

S-29

須 惠 器	破片
土 師 器	破片、高坏

S-30

須 惠 器	坏a1、甕×壺
土 師 器	甕、坏a1(セット)
石 製 品	砥石
弥生土器	破片
土 製 品	玉

S-31

須 惠 器	壺b、破片
土 師 器	破片

S-32

土 師 器	坏破片
-------	-----

S-33

須 惠 器	坏c
土 師 器	破片

S-34

須 惠 器	破片
-------	----

S-35

須 惠 器	壺×甕、破片
土 師 器	甕破片
石 製 品	石鏝

S-35暗褐土

須 惠 器	坏a1、甕×壺、坏a
土 師 器	甕(2次被熱)
土 製 品	不明
そ の 他	鉛滓

S-35明褐土

須 惠 器	坏a1、甕a1
土 師 器	小壺、甕、壺
弥生土器	壺

S-35竈内

須 惠 器	破片
土 師 器	甕

S-35a

須 惠 器	破片
土 師 器	破片
石 製 品	チップ(黒曜石)

S-35b

土 師 器	破片
-------	----

S-35煙道

土 師 器	甕破片、破片
-------	--------

S-35d (S-35より新しい)

須 惠 器	壺b、破片
土 師 器	坏(?)、破片

宮ノ本遺跡 第10-2 次調査 出土遺物一覧表 (2)

S-35盤溝

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-35c

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-38

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-40

須	恵	器	蓋a1
土	師	器	坏a、高台?、甕

S-41

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-42

須	恵	器	破片
土	師	器	破片

S-43

須	恵	器	破片
土	師	器	破片
瓦	類		破片

S-44

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-46

石	製	品	チップ(黒曜石)
---	---	---	----------

S-47

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-48

土	師	器	甕
---	---	---	---

S-50

須	恵	器	坏
石	製	品	フレーク(黒曜石)

攪乱

須	恵	器	坏a、甕
土	師	器	破片、坏

表土

須	恵	器	破片、蓋a1、坏×柄c
土	師	器	甕
白		磁	壺他：破片
弥	生	土	器
			破片

灰褐土(包含層)

須	恵	器	坏a1、蓋3、壺×甕、壺b、坏a、坏c、高坏
土	師	器	甕、破片、壺、蓋1、坏a
黒	色	土	器
		A	破片
石	製	品	フレーク(黒曜石)
弥	生	土	器
			壺、破片、器台
土	製	品	羽口



第21図 宮ノ本遺跡第14次調査 遺構全体図 (1/100)

3. 宮ノ本遺跡 第14次調査

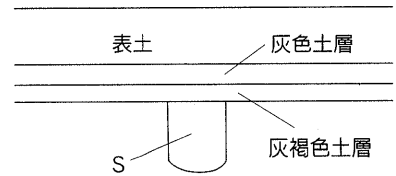
(1) 調査に至る経過

調査区は、太宰府市大字向佐野409-2、409-3に位置する。佐野地区区画整理に伴う工事の事前に実施した発掘調査である。調査前までエノキダケの栽培場があった場所で、敷地の南西部分のみ調査を行った。なお工場部分の試掘では遺構はみつかっていない。開発対象面積は1,133m²、調査面積は247.5m²。平成10年9月11日から11月4日まで実施し、井上信正が担当した。遺物はパンケース2箱出土し、現在文化ふれあい館収蔵庫に収蔵している。

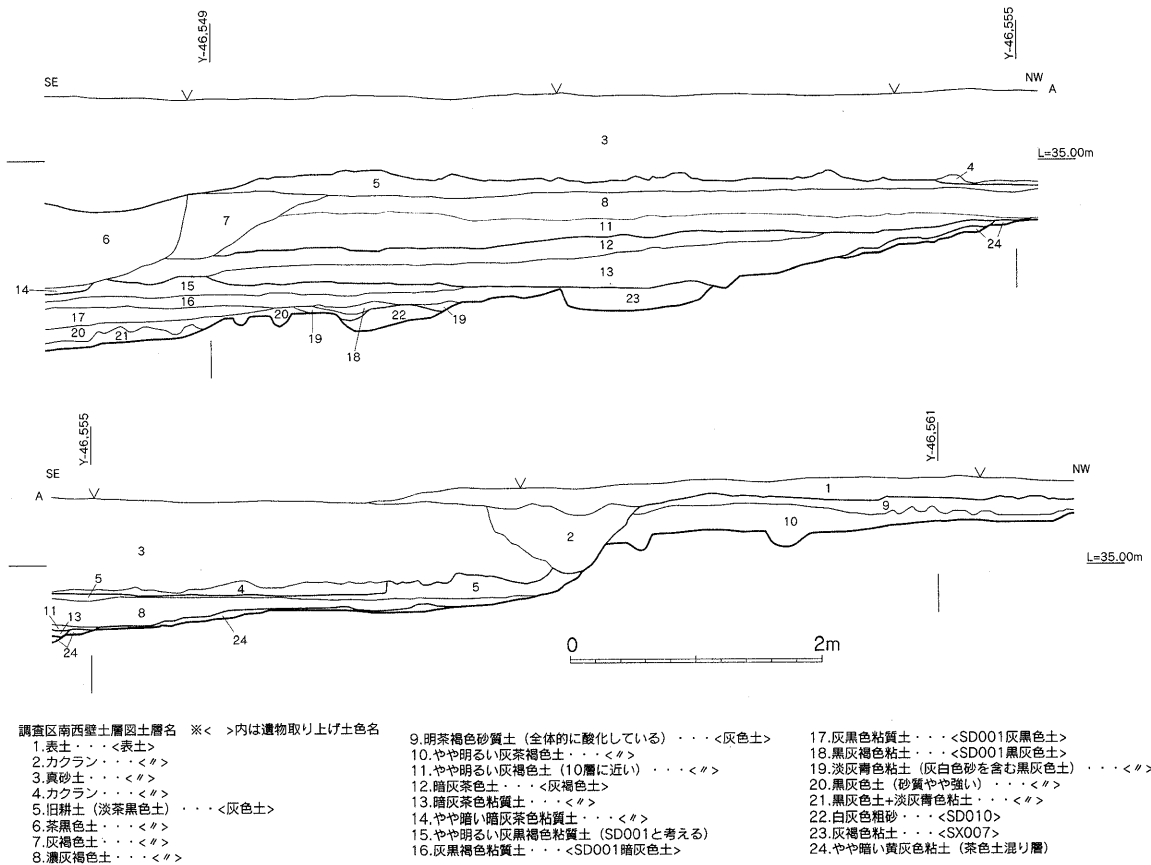
(2) 基本土層 (第22・23図、写真図版.PL26-91、PL27、PL28-94)

旧地形では調査区南西隅 (7ライン以西付近) にもともと段差があり、西側が高くなっていたことが調査区南西壁土層観察により確認できるが、重機による表土除去の際掘り下げてしまったため、状況はわからない。この段差の東側は、南東に向かう緩やかな斜面となっており、この上に遺構が展開している。

この緩斜面部においては、表土の真砂盛土を除去すると旧水田関連層が検出され、その下より遺物包含層 (灰褐色土層) が検出される。この下に遺構面があるため、遺構面検出時には遺



第22図 宮ノ本遺跡第14次調査土層模式図



第23図 宮ノ本遺跡第14次調査 南西壁土層図 (1/60)

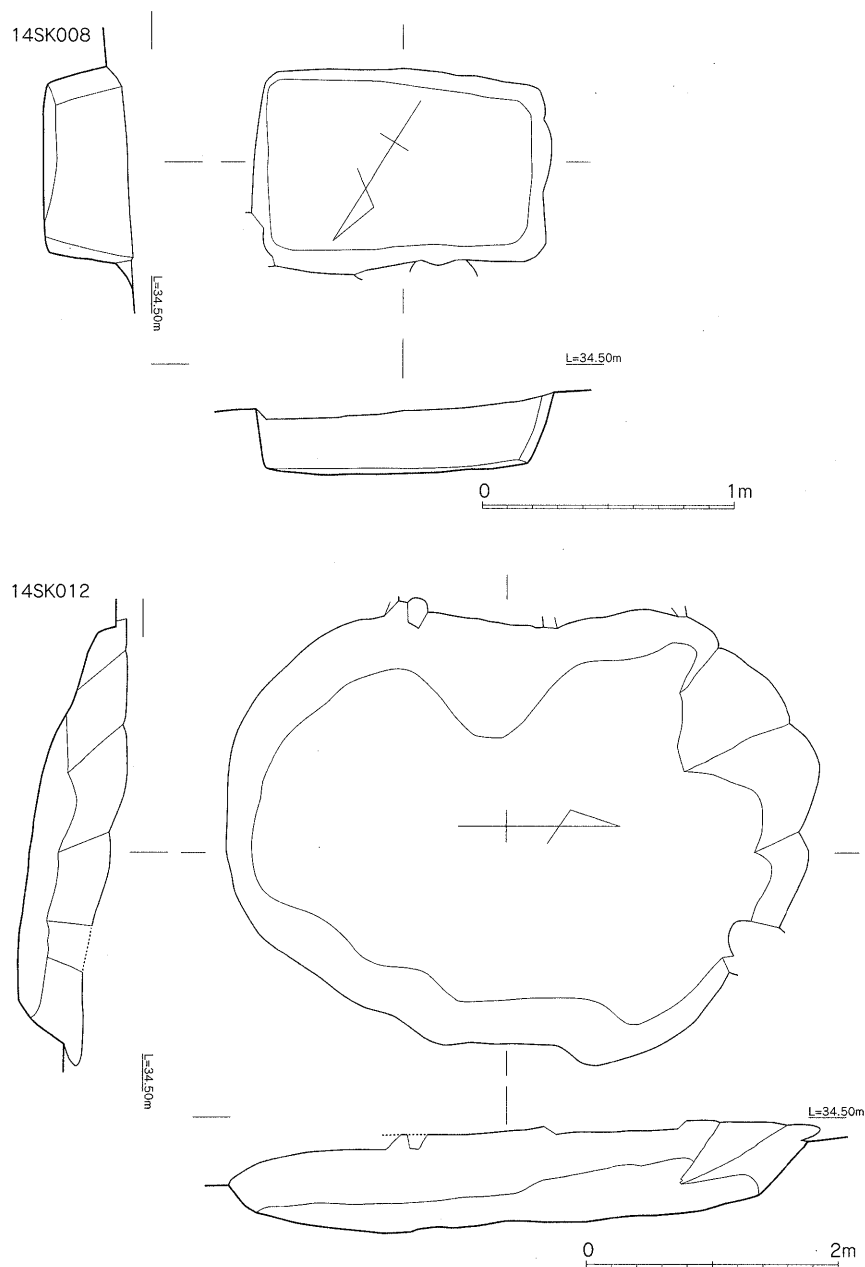
構面全体を覆う層位を灰褐色土層とし遺物取り上げを行った。なお旧水田関連層は、灰色土として遺物収集を行っている。

(3) 遺構

a. 溝

14SD001 (第21図)

調査区の東側で検出した大溝または谷の一部である。検出幅はおよそ5~6.5m、深さは最大0.5m程度。



第24図 14SK008・012 実測図 (SK008 は1/30、SK012 は1/60)

溝は南西―北東方向に走行しているが、調査区内では溝最下位の標高はほぼ一定であり、流下方向については定かではない。調査区内では溝底に向かう緩やかな傾斜面のみが検出されており、溝底は調査区を超えたさらに東側にあるようである。遺構検出状況や土層観察から判断すると、調査区東半分が本遺構埋土に覆われていたようである。埋土は上から暗灰色土、灰黒色土、黒灰色土の順である。

14SD009 (第21図、写真図版.PL28-95)

調査区北～西側で検出した。検出長約12.5m、最大幅2.2m、深さは最大約0.5m。北に対して少し東に振れながら南北方向に走向している。溝底はわずかに北が低くなっている。埋土は上から茶色砂、茶灰色土の順である。ここからは近現代の陶磁器が出土している。

14SD010 (第21図)

調査区の東側で14SD001除去後に検出した自然流路とみられる溝である。検出長は約15m、幅1～1.8m、深さ約0.2m。14SD001と同じく南西―北東方向に走行している。溝底はほぼ水平だが、北東隅に一段深く掘られた部分があることや周辺地形から、北東方向に流れ下っていたと想定される。埋土中には白灰色砂が堆積している。

b. 土坑

14SK005 (第21図、写真図版.PL29-96)

調査区の中央に位置する遺構である。北東―南西に細長く、南西側は南に屈曲している。長軸の長さは約10m、幅は1.2～3m程度。埋土は上層に灰青色土が薄くたまっており、これを除去すると下から土坑が検出された。この土坑の平面プランも同様の形状をしており、長軸の長さは6.5m、幅は1～1.3m程度、深さは最大約0.5mを測る。下層土坑の埋土は暗灰青色土である。

14SK008 (第24図、写真図版.PL29-97、PL30-98)

調査区中央東側で14SD001除去後に検出した。平面プランは長方形を呈す。長軸は1.2m、短軸は0.72m、深さ0.34mを測る。埋土は黒色土で、弥生土器の細片が検出された。

14SK012 (第24図、写真図版.PL30-99)

調査区の北東に位置する遺構で、14SD001除去後に検出された。平面プランは不定形ながらおおそ楕円形を呈しており、長軸は4.74m、短軸は3.5m、深さは最大0.46m程度を測る。埋土は上から黄褐色粘土、黒灰色土の順である。ここから土師器片の他、縄文土器片が出土している。

c. 小穴

14SX007 (第21図)

調査区南端に位置する小穴群である。14SD001除去後に検出した。当初一つの遺構ととらえたが、小穴が2基切りあっていたようである。調査区南西壁に一部がかかっている。

(4) 遺物

a. 溝出土遺物

14SD001暗灰色土 (第25図)

土師器

小皿 a (12) 口縁部の破片である。残存高1.0cm。底部切り離しはヘラ切り。

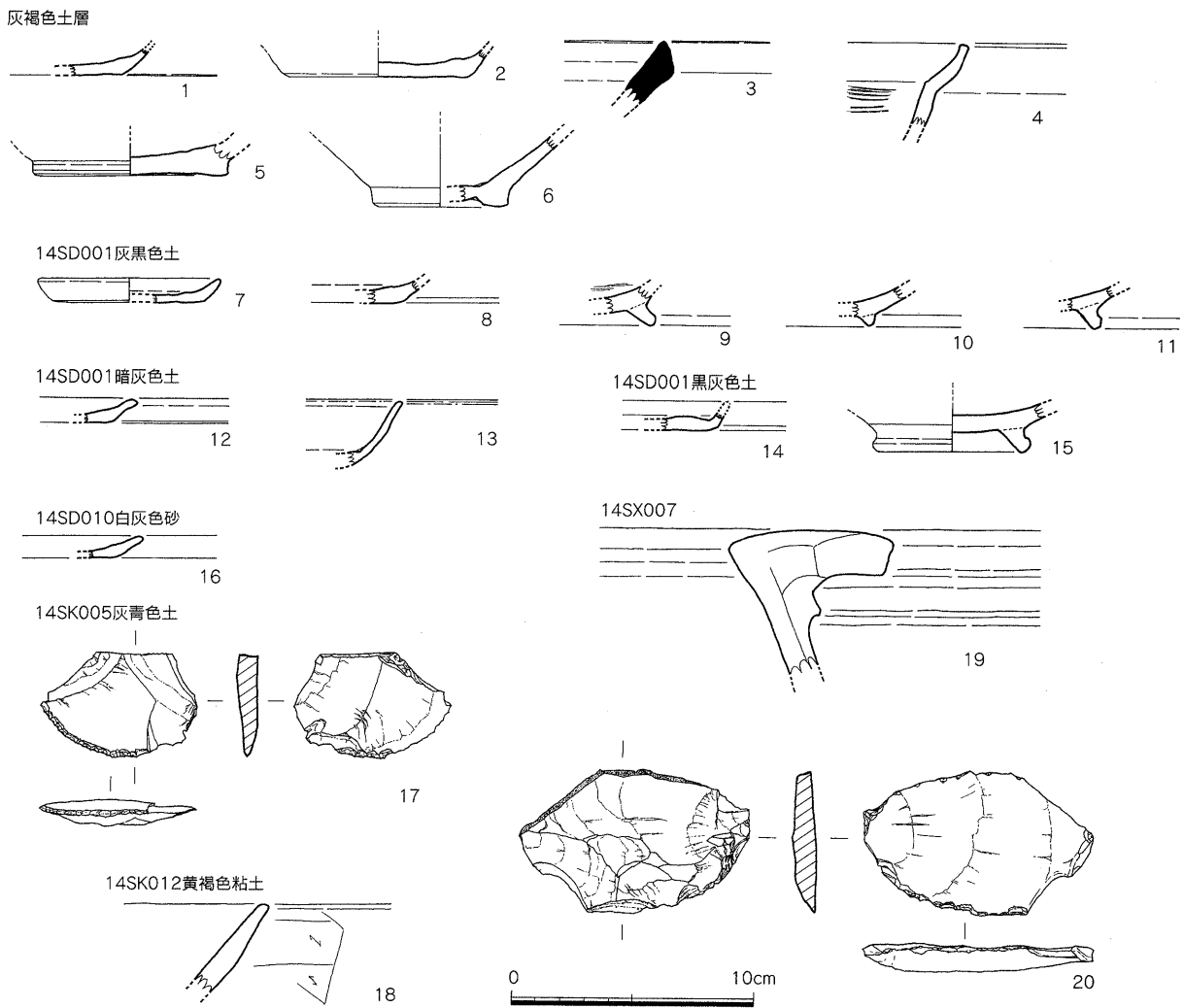
白磁

皿 (13) 口縁部の破片である。残存高2.7cm。口縁部は釉をふき取っている。IX類。

14SD001灰黒色土 (第25図)

土師器

小皿 a (7・8) 7は口径7.5cm、器高1.0cm、底径6.2cm。底部切り離しは糸切り。8は底部の破片で、



第25図 宮ノ本遺跡第14次調査 出土遺物実測図 (1/3)

残存高2.0cm。底部切り離しは同心円状の条痕がみえるが、糸切りかへら切りかは不明。

黒色土器A類

椀 c (9) 底部の破片である。残存高1.6cm。

黒色土器B類

椀 c (10・11) 10は底部の破片である。残存高1.7cm。11も底部の破片である。残存高1.7cm。

14SD001 黒灰色土 (第25図)

土師器

小皿 a (14) 底部の破片である。残存高0.7cm。底部切り離しは同心円状の条痕がみえるが、糸切りかへら切りかは不明。

黒色土器B類

椀 c (15) 底部の破片である。残存高2.0cm、高台径6.4cm。

14SD010白灰色砂（第25図）

土師器

小皿 a（16） 口縁部の破片である。残存高0.9cm。底部切り離しは不明。

b. 土坑出土遺物

14SK005灰青色土（第25図）

石製品

石匙（17） 剥片端部に歯をつけた程度の石匙である。図上で天地幅4.3cm、左右幅6.45cm、厚さ0.9cmを計る。安山岩製。

14SK012黄褐色粘土（第25図）

縄文土器

深鉢（18） 口縁部の破片である。残存高3.7cm。内外面にミガキがみられ、外面は板状工具により横方向にミガキを施している。胎土のきめはやや粗く、0.2～4.0mm程度の砂粒、雲母片を多く含む。焼成は良好で、内面は淡褐色～淡茶色を、外面は黒褐色～灰茶色を呈す。

c. 小穴出土遺物

14SX007（第25図）

弥生土器

甕（19） 甕棺に利用される大型甕の口縁部の破片である。残存高6.0cm。鋤型の口縁部の下には突帯が一条巡る。胎土のきめはやや粗く、0.2～6.0mm程度の砂粒、および少量の雲母片を含む。焼成は良好。明茶色を呈す。

石製品

石匙（20） 製品というより、剥片端部に歯をつけた程度の石匙である。歯も片面（図右側の面下部）にしがついていない。図上で天地幅5.9cm、左右幅9.4cm、厚さ1.0cmを計る。安山岩製。

d. 各層出土遺物

灰褐色土層（第25図）

土師器

小皿 a 1（1） 底部の破片である。残存高1.2cm。底部切り離しは糸切り。

坏 a（2） 底部の破片である。残存高1.15cm、底径7.2cm。底部切り離しは糸切り。

須恵質土器

鉢（3） 口縁部の破片である。残存高2.65cm。内外面ともヨコナデを施す。胎土はややきめ細かく、1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元は良好で、内面は明灰色、外面は明灰色～黒灰色を呈す。

土師質土器

鍋（4） 口縁部の破片である。残存高3.45cm。体部と口縁部の境は屈曲して外反し、やや内傾しつつ口縁端部に至る。体部内面は横方向のハケ目を施しており、その他はヨコナデとみられるが、摩耗により不明瞭である。外面には煤が付着している。胎土はややきめ粗く、0.1～3.0mm程度の白色砂粒をやや含む。焼成はやや良好で、内面は暗茶白色～黒灰色、外面は黒褐色～暗灰色を呈す。

緑釉陶器

椀（5） 底部の破片である。残存高1.3cm、底径8.0cm。外面底部は摩耗のため不明瞭ながらも糸切りの可能性がある。内外面とも透明感のある淡明緑色の釉が施釉される。胎土のきめは細かく、1.5mm前後の白色砂粒をわずかに含む。焼成は良好。

高麗青磁

椀(6) 底部の破片である。残存高2.9cm、高台径5.0cm。釉は透明で光沢があり明緑灰色に発色する。ただ高台部はやや濁っているようである。釉のかかりは良好。素地は灰色味を帯び、きめ細かい。I類。

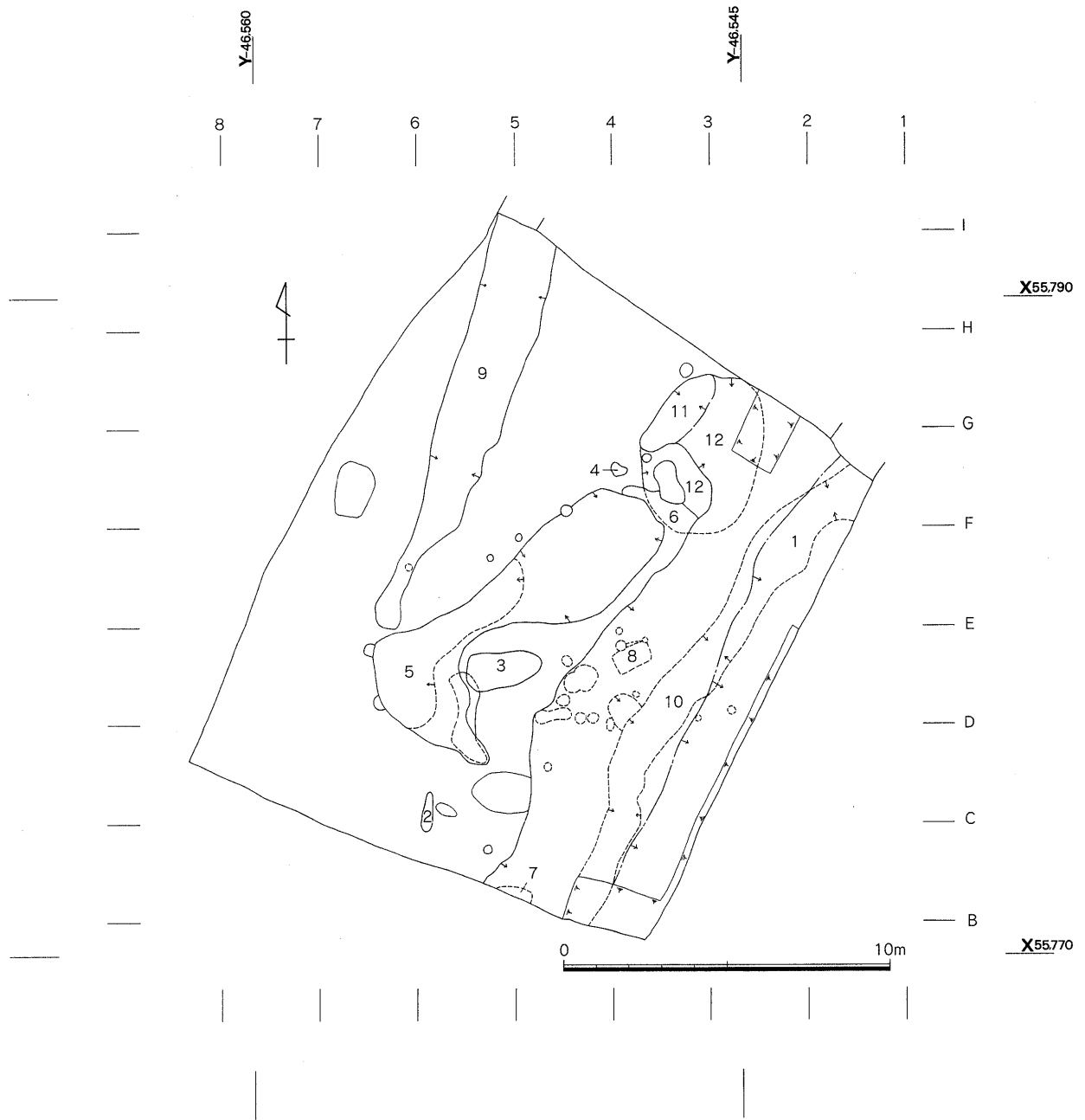
(5) 小結

本調査区は、弥生時代終末期～古墳時代初頭より古墳・墳墓が営まれた宮ノ本丘陵の南東斜面の丘陵裾に位置する。

本調査区の丘陵側(北西)隣地の宮ノ本遺跡第13次調査では、平安時代の木棺墓が検出されていたことから、丘陵裾である本調査区のどこまで墳墓・その他の遺構が展開しているか、丘陵裾には墓域を区ごるような施設が存在するのだろうか、といった疑問があがり、本調査で解決を図ることができるのではないかと考え、調査に臨んだ。

調査の結果、遺構が希薄となっており、古代以前の墳墓群の墓域はここまでは広がっていなかったようである。また墓域を区切るような施設も見つからなかった。

なお、調査区東壁に沿うように自然流路14SD001及び14SD010を検出した。いずれも埋土からも平安時代後期～鎌倉時代にかけての遺物が出土しており、宮ノ本丘陵の墳墓群とは時期差があって直接関わりがないようである。ただ、地形からみてもここは丘陵末端部で、この付近で周辺に広がる平地と宮ノ本丘陵とを視覚的に分けることができること、14SD001に沿うように古代以前の遺物を出土するその他の遺構も検出されていることから、14SD001に近似する位置に丘陵(墓域)の境界を求められるのではないかと推察する。



第26図 宮ノ本遺跡第14次調査 遺構略測図 (1/200)

宮ノ本遺跡 第14次調査 遺構番号一覧表

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	地区番号
1	宮14SD001	溝状遺構	出土遺物の主体は平安中～後期	黒灰色土→灰黒色土→暗灰色土	7・8・10・11・12→1	13c後半	1～47㍓
2		小穴				弥生後期～	C5
3		土坑		暗青灰色土→灰青色土			D4～5
4		小穴				古墳初頭～	F3
5	宮14SK005	土坑		暗灰青色土→灰青色土	6→5		CD5～6
6		土坑×たまり状遺構		黒灰色土	6→5		EF3
7	宮14SX007	小穴群			7→1	弥生中期～	B4～5
8	宮14SK008	土坑		黒色土	8→1	弥生後期～	D3
9	宮14SD009	溝状遺構	F5灰褐色土中に、S-9の遺物がやや混ざる	茶灰色土→茶色砂		近現代～	5～67㍓
10	宮14SD010	溝(流路)	白色粗砂堆積	白灰色砂	10→1	平安中～後期	3～47㍓
11		たまり	S-11とS-12は同一遺構の異時期堆積と思われる。	11黒灰色土→1灰黒色土	11→1灰黒色土	古墳・古代～	G3
12	宮14SK012	土坑	自然堆積か	黒灰色土→黄褐色粘土	12→11→1灰黒色土	古墳・古代～	FG2～3

宮ノ本遺跡 第14次調査 土師器供膳具計測表

A:内底ナデ B:板状圧痕
単位はcm。()は復元径。

S-1灰黒色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1 イト	R-001	(7.5)	1.0	(6.2)	○	—	
	小皿a ヘラ×イト	R-002	—	2.0+	—	○	—	

S-1黒灰色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a ヘラ×イト	R-001	—	0.7+	—	○	○	

S-1暗灰色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1 ヘラ?	R-002	—	1.0+	—	—	—	

S-10白灰色砂

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	—	—	0.9	—	—	—	

宮ノ本遺跡 第14次調査 出土遺物一覧表

S-1

土 師 器	高坏
-------	----

S-1暗灰色土

須 惠 器	坏c、坏×皿、甕、壺、片
土 師 器	小皿a1、椀(古墳)、椀c(平安)、高坏(古墳) 甕(古墳初頭)、甕×壺(古墳)
龍泉窯系青磁	椀;I(1) 壺;I(1)
白 磁	椀;II系(1) 皿;IX(1)
弥生土器	甕×壺
石 製 品	黒曜石片、安山岩片

S-1灰黑色土

須 惠 器	坏×蓋、蓋c、蓋3、坏蓋(古墳)、甕、壺
土 師 器	坏a、小皿a1(イト)、椀c、高坏(古墳) 甕×壺、小壺
黒色土器A類	椀c
黒色土器B類	椀c
灰釉陶器	壺
白 磁	椀;V-2b×V-3b(1)
弥生土器	甕(須玖式)、壺
石 製 品	and-f、ob-f、砥石(泥岩製)
金 屬 製 品	鉄滓

S-1黒灰色土

須 惠 器	坏c、甕、壺
土 師 器	小皿a? (へラ)、高坏(古墳)、甕×壺(古墳初頭) 脚付壺×脚付鉢、小型丸底壺
黒色土器B類	椀c
弥生土器	甕(弥生後期)

S-2

弥生土器	壺×甕(後期)
------	---------

S-3灰青色土

土 師 器 ?	片
---------	---

S-4

土 師 器	高坏(古墳初)、甕×壺
-------	-------------

S-5灰青色土

石 製 品	石匙
-------	----

S-6

土 師 器	片
-------	---

S-7

弥生土器	甕(須玖式。甕楕か)
石 製 品	and-af

S-8

弥生土器	甕×壺
------	-----

S-9茶灰色土

須 惠 器	高坏×長頸壺、甕
土 師 器	坏a(イト)、小皿a1
白 磁	壺他;片(1)
肥前系陶磁器	甕、供膳具
国産磁器	小壺、片
弥生土器	壺?

S-10白灰色砂

須 惠 器	蓋>坏、甕
土 師 器	小皿a1、高坏、鉢、壺
黒色土器A類?	片
黒色土器B類?	片
弥生土器	甕×壺(後期)
石 製 品	and-af、ob-f

S-11黒灰色土

土 師 器	片
-------	---

S-12黄褐色土

縄文土器	深鉢
------	----

S-12黒灰色土

土 師 器	甕
-------	---

灰褐色土

須 惠 器	坏a、坏c、蓋3、高坏、瓶、甕、壺
土 師 器	坏a、坏a(イト)、小皿a、高坏(古墳)、椀c 甕、小型丸底壺、二重口縁壺
黒色土器A類	片
黒色土器B類	椀c、片
越州窯系青磁	椀;I(2)
龍泉窯系青磁	椀;II-b(1)、I-3a?(1)
同安窯系青磁	椀;片(1)
高 麗	椀;I(1)
須 惠 質 土 器	片口鉢(東播系)
瓦 質 土 器	摺鉢
緑 釉 陶 器	椀(洛西)
国産陶器	片
白 磁	椀;V-4(1)
肥前系陶磁器	椀、片
弥生土器	甕、壺
縄文土器	鉢
石 製 品	滑石片、ob-f、and-f

灰色土

須 惠 器	坏c、蓋3、甕、大甕
土 師 器	坏a、小皿a、小皿a(イト)、坏×椀 高坏(古墳)、甕×壺
黒色土器A類	椀、椀c?
黒色土器A類?	片
越州窯系青磁	水注(1)
龍泉窯系青磁	椀;II-b(1)
白 磁	椀;V(1)、片(1)
肥前系陶磁器	片
弥生土器	甕×壺(弥生中期~)
瓦 類	片
石 製 品	ob-f

表土

須 惠 器	坏c、坏蓋、蓋c、蓋3、甕、壺、小壺
土 師 器	坏a(平安中期~)、坏c、甕×壺
黒色土器A類	椀c
黒色土器B類	椀c
越州窯系青磁	椀;II?(1)
龍泉窯系青磁	椀;片(2)
国産陶器	片
白 磁	椀;II系(1)、IV(1)、IX(1) 皿;V?(1)
中国陶器	壺;(1)?
肥前系陶磁器	蓋?、小椀
弥生土器	甕×壺
瓦 類	平瓦(格子)、片(焼し瓦)
そ の 他	スレート

Z

須惠器	蓋?
-----	----

IV、結語

宮ノ本遺跡の南裾部の様相

今回報告した宮ノ本10,10-2,14次調査区は奇しくも宮ノ本丘陵の南裾に位置し、各時期の遺構もおのおのが所属する単位遺跡の境界に位置する。

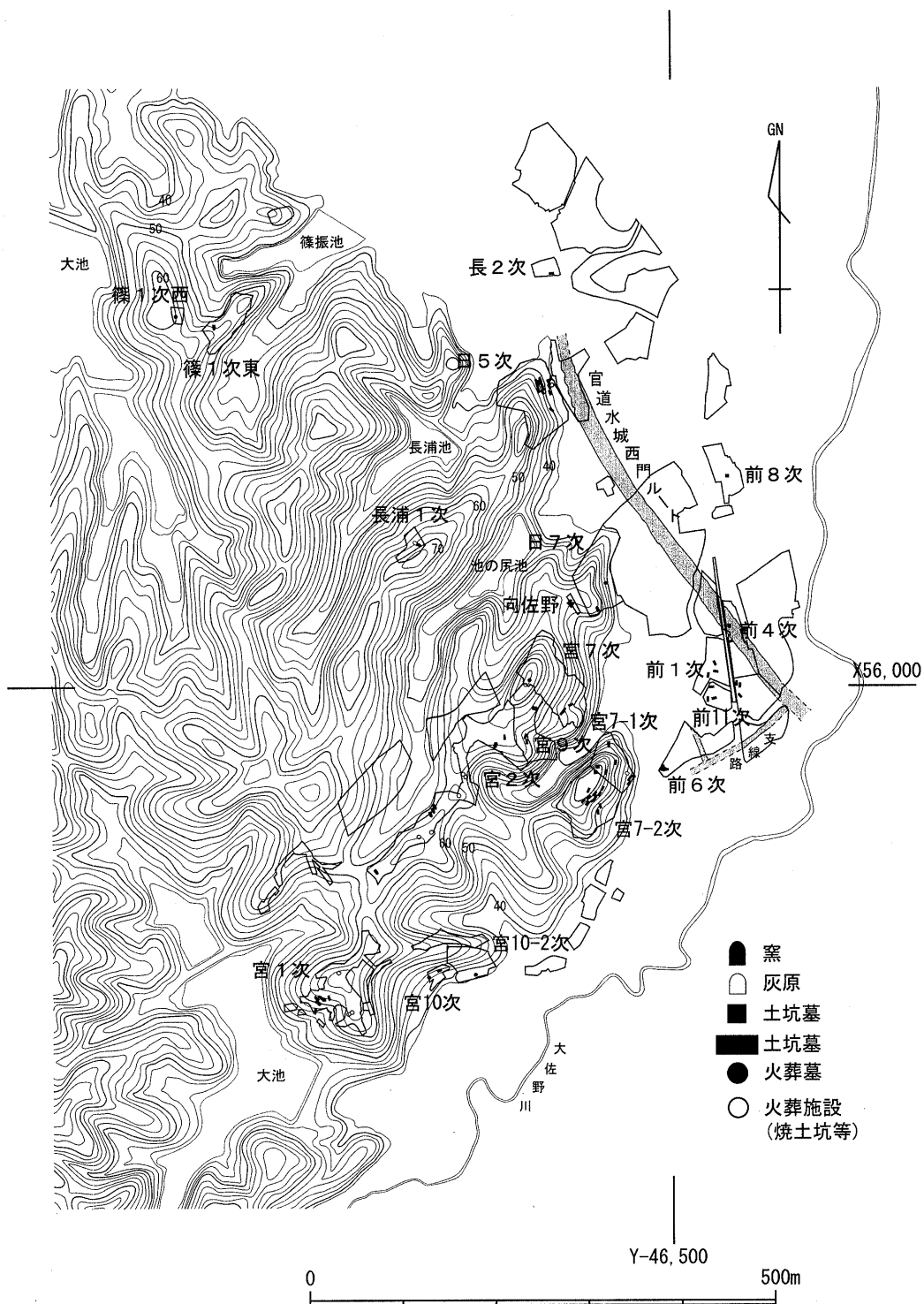
弥生時代においては10次で方形プランを呈す弥生後期の住居跡、14次では大型甕棺の破片が出土している。同時期の遺構は北東約300mにある前田遺跡にその集中部があるが、後期中ごろから後半にかけての住居は非常に希薄であり、今回の発見で散在的な様相をさらに強くしている。また、中期の須玖式期に至っては前田遺跡では3次で円形住居が1棟発見されたに止まっており、集落的様相は掴めていない。墳墓は大佐野川の対岸にある殿城戸遺跡で小児甕が発見された程度で、これも皆目わかっていない。希薄であるが分布しているという状況がこの地域の中期的様相といえよう。

古墳時代には10,10-2次で一定量の須恵器を消費する後期の住居が複数見つかっている。住居は丘陵裾を階段状に空間利用する形で、しかも掘り方は一方が斜面に切り込むような形で形成されている。この時期の住居群は南の馬場、京ノ尾遺跡という大佐野川沿いのエリアにその中枢があり、緩斜面とそれに連なる平地を利用した集住空間を形成している。しかし、この時期の墳墓は未発見であり、その意味で10-2次のSX050が古墳後期の小石室墓であるとすれば、葬送施設としては唯一のものとなる。しかし、その認定については取上げる要素が少なく参考遺構とせざるをえないが、次時期の古代火葬墓が突然出現し、その前段では在地の葬送施設はない、とされる従来の見解に一石を投じる可能性がある。

古代は10,10-2次で奈良末、平安初期頃の火葬墓が1基づつ発見され、10次で大宰府VII期（9世紀中頃～後半頃）の土葬墓（釘の存在から木棺墓か）が発見された。火葬墓についてはこの10次と10-2次では同一斜面内の50mほどの間隔で形成されている。両者とも土器の特徴から大宰府VI期頃の所産かと考えられる。この時期には日焼7次や殿城戸8次など宮ノ本丘陵の外延部や川の対岸の丘陵裾などに墓域が拡大する傾向が見られる。宮ノ本における火葬墓の展開については従来の所見では、「群集するものは一例もなく、2基一対とみられる宮ノ本7,8号墓にしてもかなり小規模な範囲の造成であり・・・、位置的に近接する同時期の墳墓として宮ノ本4号墓と同7,8号墓が挙げられる。両者は同一の遺跡名を冠してはいるものの、大きな丘陵の中央部と西端部にあたりその距離はおおよそ300mの間隔がある。この遺跡内には他に10号墓とした火葬墓と判断されるものがあるが、仮にこれを含めて捉えても三者の距離は各々100m内外を測り、各墳墓の単独性を強調できるものと思われる。」「この時期の墳墓における墓域の想定では水野正好が太安萬呂墓において試みており参考になる。こうしたことを考慮すれば宮ノ本遺跡の範囲内に少なくとも3つの墓域が存在していた可能性を指摘できる。」「この点は次のIIB期（8世紀中頃～後半）にみられる宮ノ本1号墓が、買地券を保有していたことと密接な関係があると考えられる。それは宮ノ本1～3号墓に先行して同4号墓という先住者のあることが判明しており、4号墓は明らかに2号墓と重複関係にあるが、4号墓が先述のとおり広域の墓域を確保していたとするならばその先住者に対して買地券が必要になったのであろう。」「（「古代都市・大宰府の検討 墳墓からのアプローチ」狭川真一『古文化談叢』第23集九州古文化研究会）とされてきた。この所見は8世紀の火葬墓立地を主眼としたもので、9世紀には造墓主体者が増えるせいか、一つの墳墓が占有する空間が狭くなったり、従来の墓域を越えた位置に造営される様相が指摘される。8世紀の造墓活動は須恵器窯の操業によって空間利用がなされていた丘陵に一定の間隔をもって墓域が設定される。2次と7次に2基併葬されたものはあるが、基本的に1基が広い丘陵斜面ないし頂部を占有している。9世紀初頭以降に遅れて造営されるものは8世紀の占有エリアを犯さず、占有面積を狭めたり新規に丘陵の外側にその場を求めている。唯一、重複している宮ノ本1次では後出の墓に買地券が収められていた。VII期以降には土葬墓が出現し、宮ノ

本7次、前田6次、日焼5次、条坊99次など、丘陵の高位から平地に至る間に家族墓的な群集した墳墓が形成され10世紀まで続いている。宮ノ本10次では火葬墓と土葬墓が連続して存在するように見えるが、火葬墓と群集する土葬墓が同一空間で検出された例はなく、個人的葬送と集団的葬送の間には時間や意味に隔たりがあるように見える。

日焼遺跡などの未発表の資料が正式に整理できた時点で再考したい。



第27図 宮ノ本遺跡における火葬墓および火葬施設の展開

写 真 図 版

※写真中の番号は、図版番号を示す。

例 図3-6

挿図番号

PL 1
宮ノ本10次



1
第10次調査区全景（西から）



2
第10次上段調査区全景（北から）

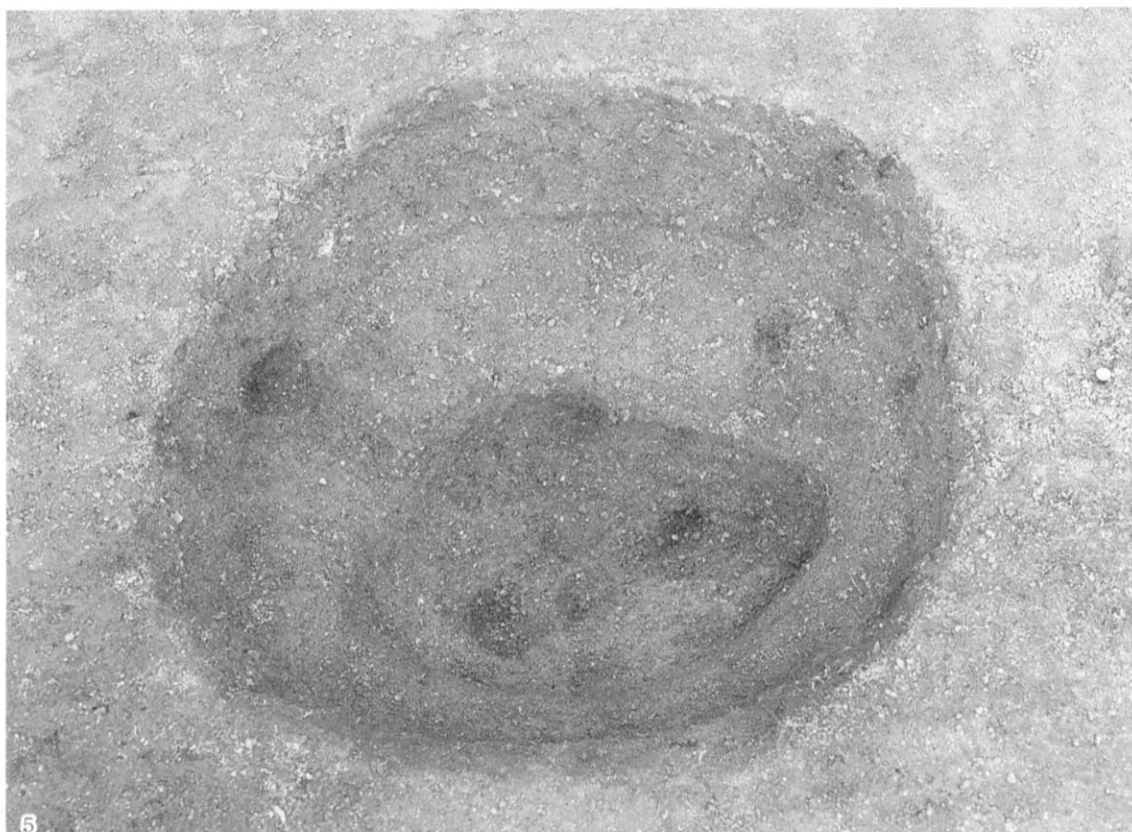


10ST001検出 (西から)



10ST001土層観察 (南から)

PL 3
宮ノ本10次



5
10ST001完掘（南から）



6
10ST005土層観察（東から）



10ST005土器出土状況（南から）



10ST005完掘（南から）

PL 5
宮ノ本10次



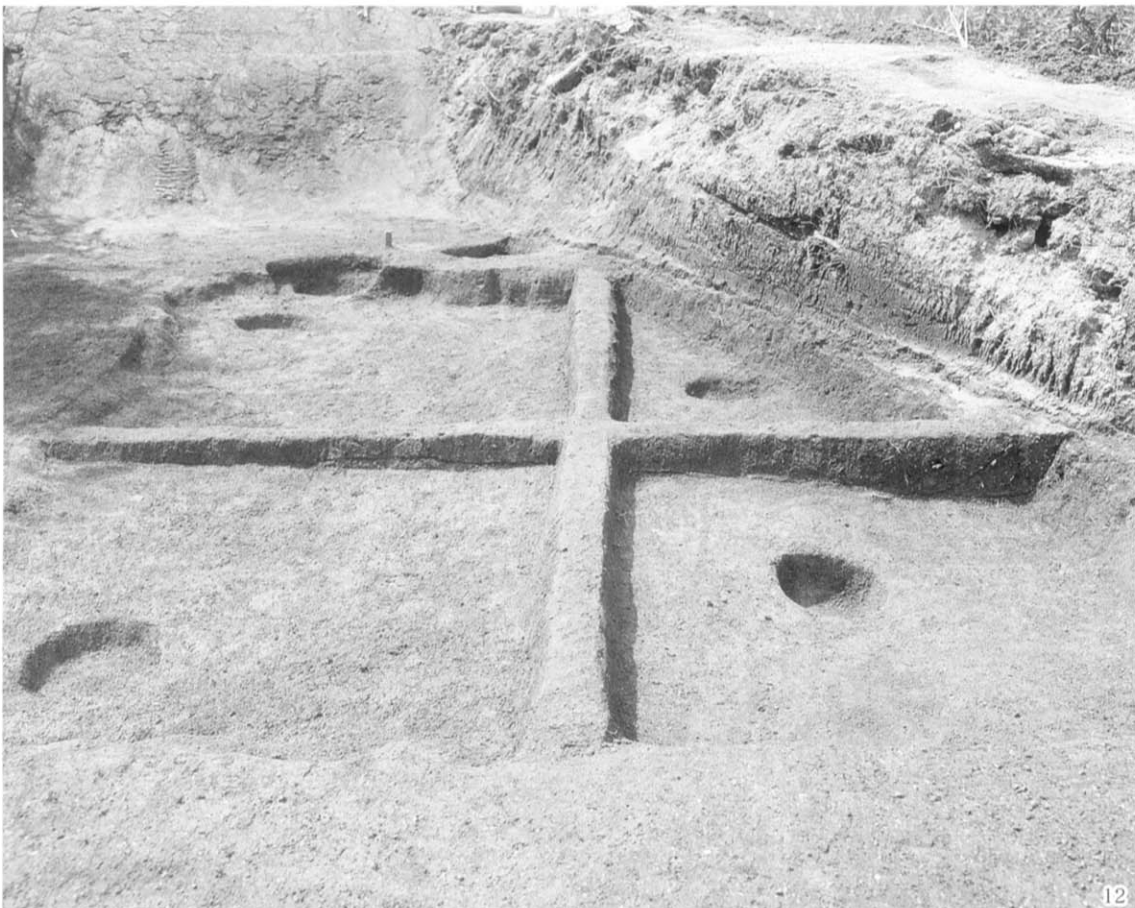
9
第10次下段調査区全景（空中写真）



10
第10次下段調査区西半部（空中写真）

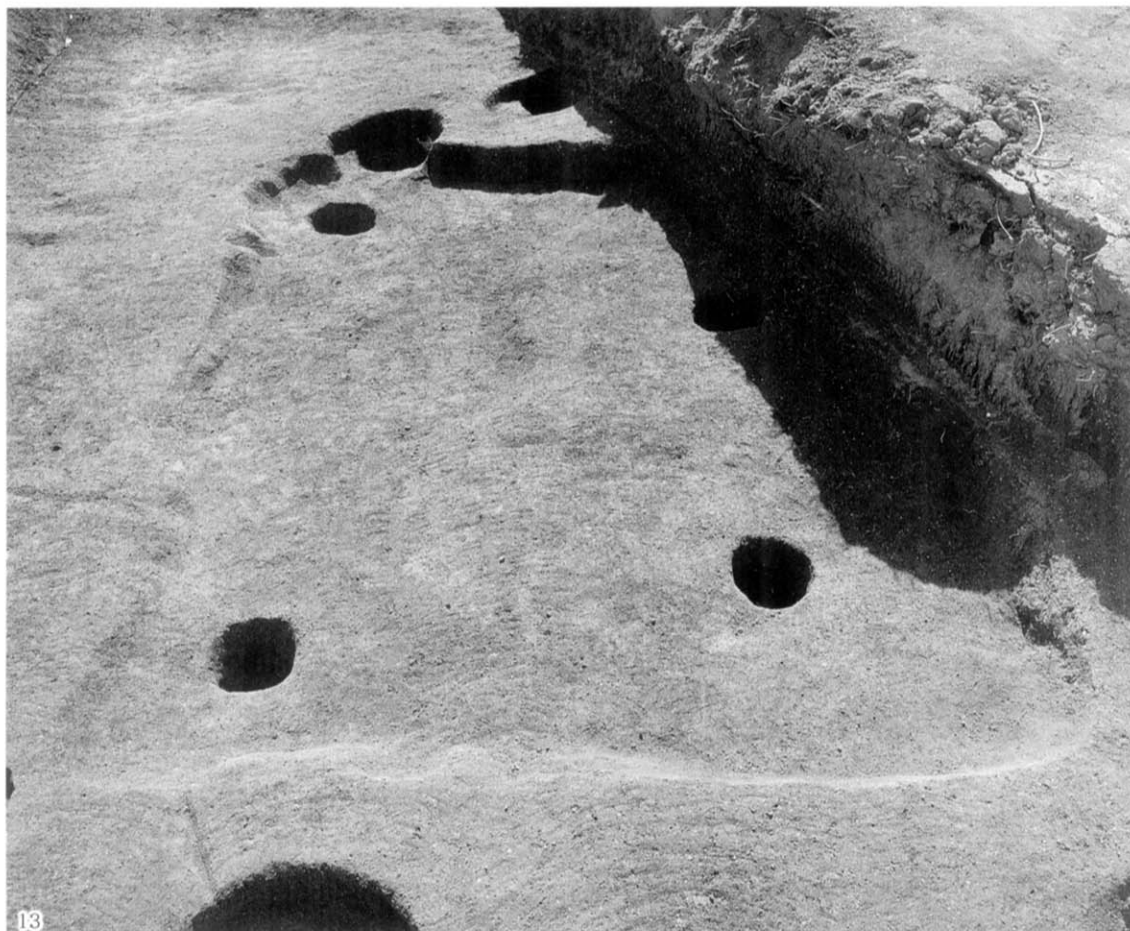


10SI015遺構内堆積土観察（東西方向、南から）



10SI015遺構内堆積土観察（南北方向、東から）

PL 7
宮ノ本10次



10SI015床検出状況（東から）



10SI015e土層観察（南から）



15

10SI015f土層観察（南から）



16

10SI015g土層観察（南から）



17

10SI015h土層観察（南から）

PL 9
宮ノ本10次



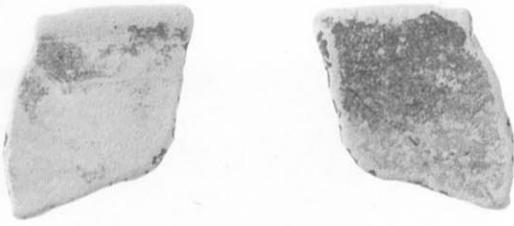
18

10SI015床土観察（南から）

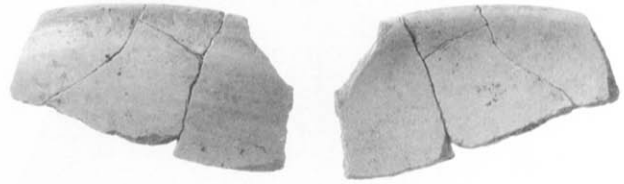


19

第10次丘陵頂部表土除去状況（東から）



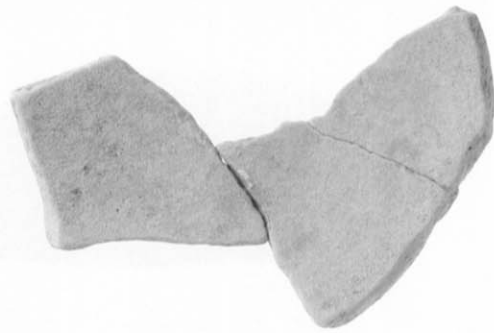
20 10ST001 図5-1外面
21 10ST001 図5-1内面



22 10ST001 図5-3外面
23 10ST001 図5-3内面



24 10ST001 図5-4表



25 10ST001 図5-4裏



26 10ST001 図5-5



27 10ST010 図5-6



28 10SI005 図6-5



29 10SI005 図6-5



30 10SI005 図6-5



31 10SX012



32 10SX018 図7-7



33

表土 図7-11



34

表土 図7-17



35

表土 図7-12



36

表土 図7-12



37

表土 図7-20



38

表土 図7-22



39

表土 図7-24



40

表土 図7-25



41

黄茶色土 図8-31



42

暗茶色土 図8-42



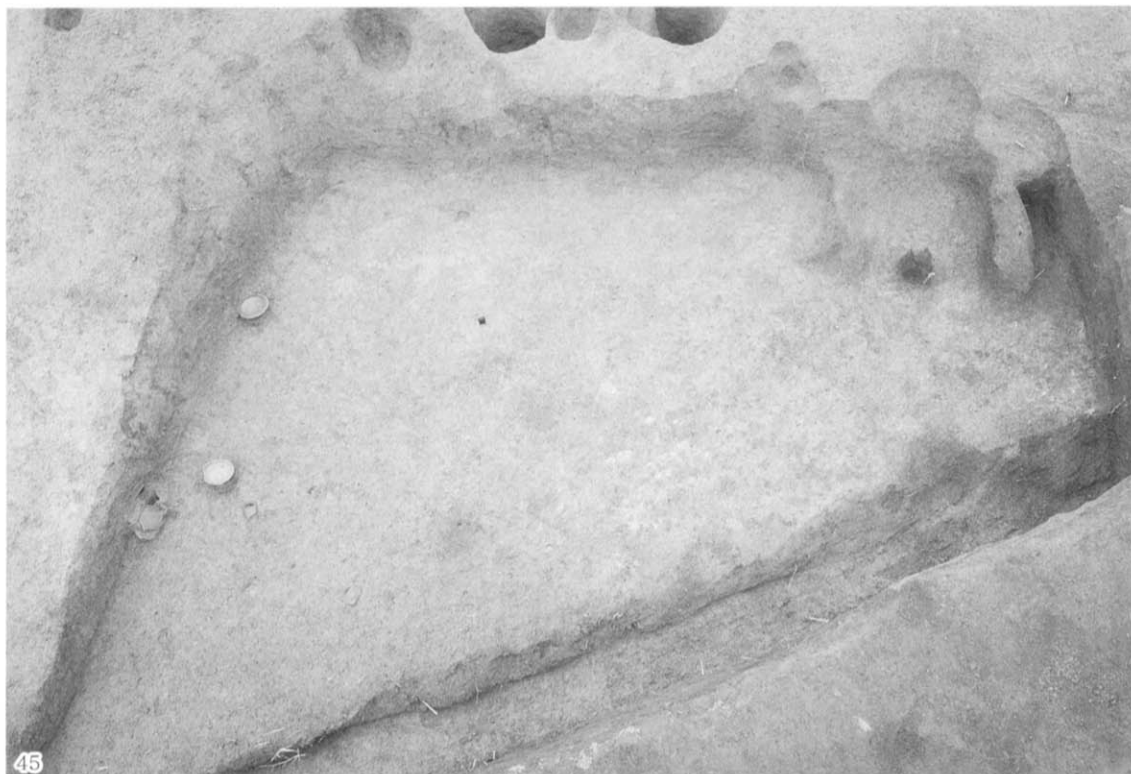
43

第10-2次調査区広角全景（南から）



44

第10-2次調査区全景（南から）



45
10-2SI030住居床面検出時（南から）



46
10-2SI030住居カマド検出時（南から）



47
10-2SI030住居床面遺物検出時1（東から）



48
10-2SI030住居床面遺物検出時2（東から）



49
10-2SI030住居床面遺物検出時3（東から）

PL 15
宮ノ本10-2次



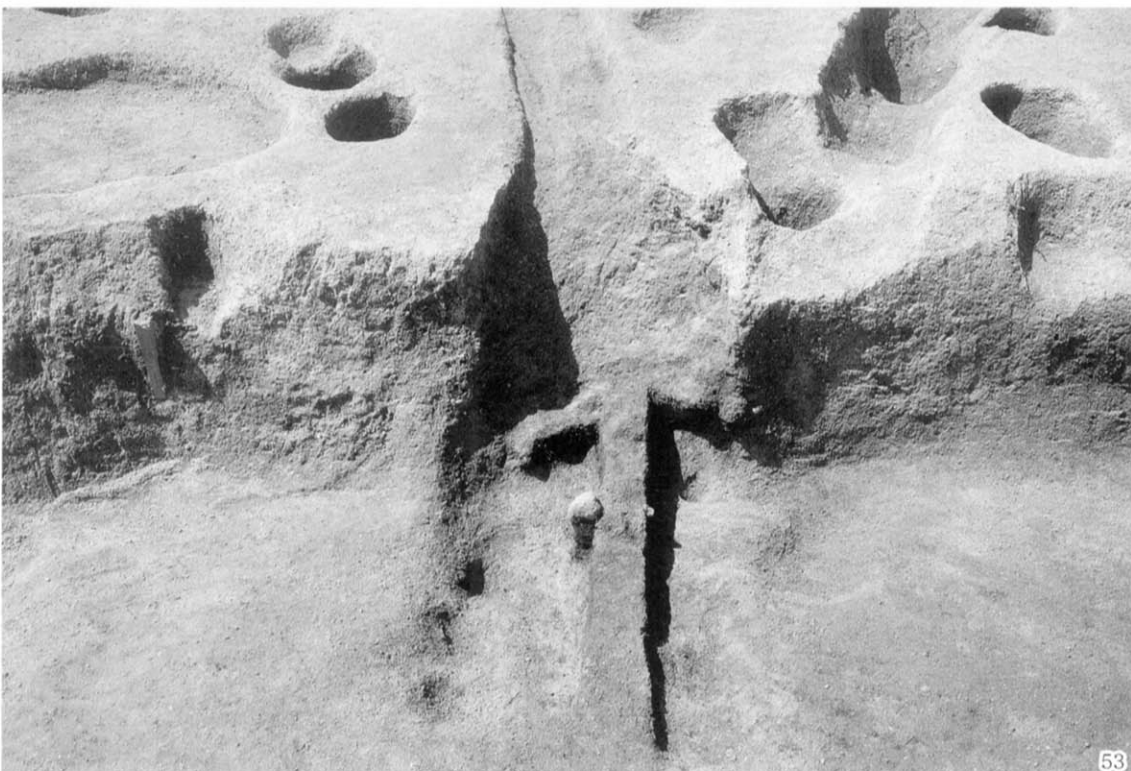
10-2SI030住居完掘時（西から）



10-2SI035住居土層堆積状況（西から）



10-2SI035住居カマド土層堆積状況1（南西から）



10-2SI035 カマド付近焼土の状況（南から）

PL 17
宮ノ本10-2次



54

10-2SI035住居カマド土層堆積状況2（南西から）



55

10-2SI035住居カマド完掘時（南から）



10-2SI035住居煙道完掘時（南から）



10-2SI035住居暗褐色土遺物出土時1（南から）



58

10-2SI035住居暗褐色土遺物出土時2（南東から）



59

10-2SI035住居完掘時（北から）



10-2SI040 住居土層堆積状況 (西から)

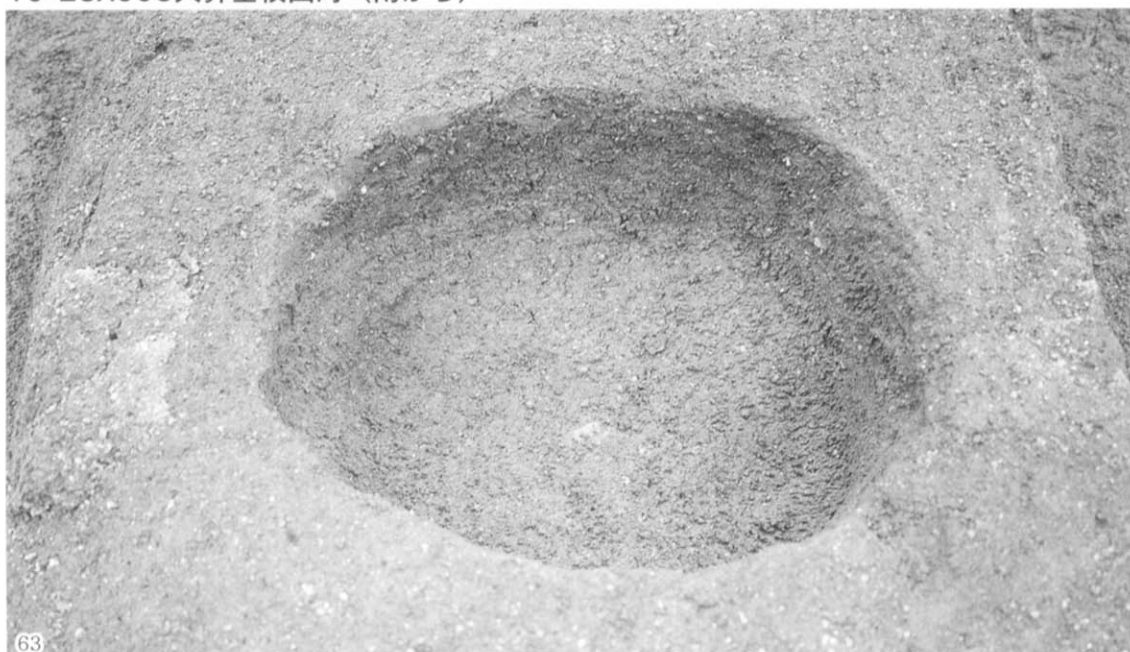


10-2SI040 住居完掘時 (北から)



62

10-2SX005火葬墓検出時（南から）



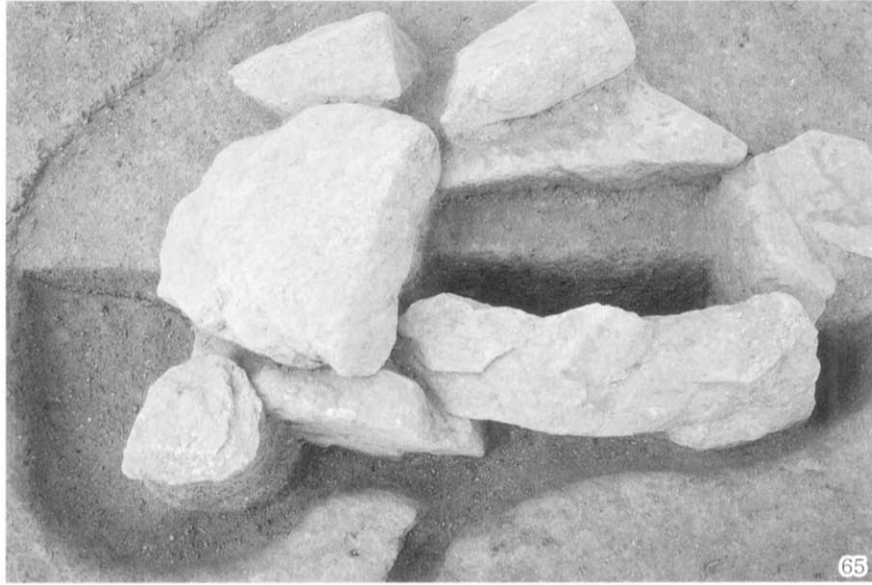
63

10-2SX005火葬墓完掘時（南から）

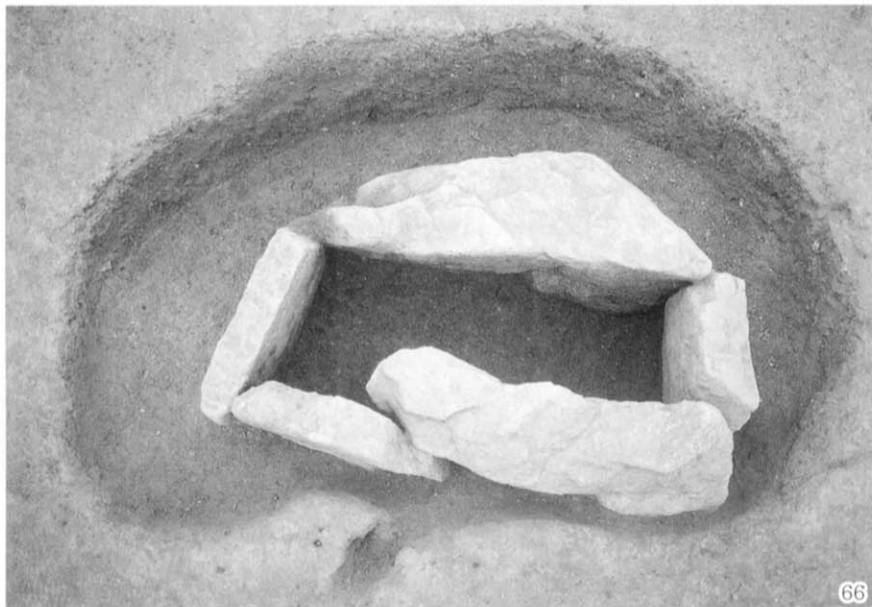


64

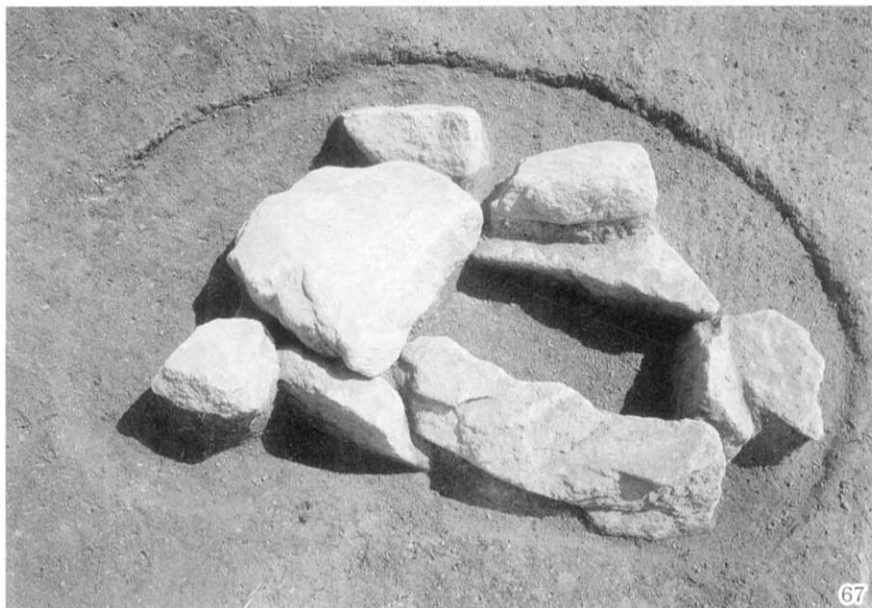
10-2SX020ピット遺物検出時（南から）



65
10-2SX050石組土層堆積状況（南から）



66
10-2SX050石組蓋石除去時（南から）



67
10-2SX050石組検出時（南から）



68

10-2SI030 図17-1



69

10-2SI030 図17-2



70

10-2SI030 図17-7



71

10-2SI035明褐色土 図17-8



72

10-2SI035明褐色土 図17-9



73

10-2SI035明褐色土 図17-10



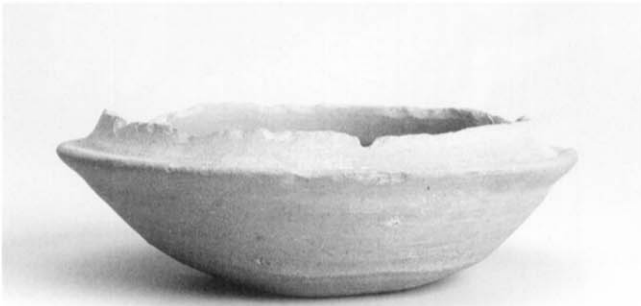
74

10-2SI035明褐色土 図17-12



75

10-2SI035暗褐色土 図17-13



76

10-2SI035暗褐色土 図17-14



77

10-2SI035暗褐色土 図17-15



78

10-2SI035暗褐色土 図17-17



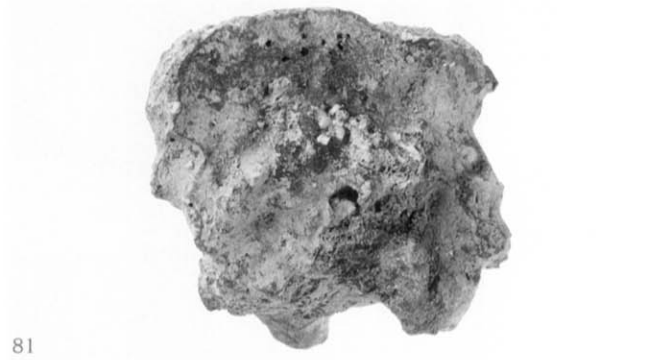
79

10-2SI035暗褐色土 18



80

10-2SI035暗褐色土 18



81

10-2SI035暗褐色土 18



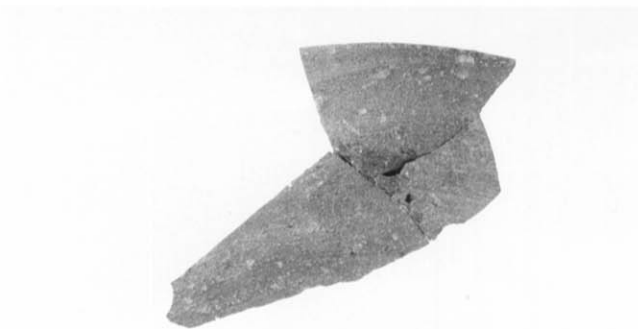
82

10-2SI035 図17-20



83

10-2SI040 図17-21



84

10-2SX050 図17-24表



85

10-2SX050 図17-24裏



86

10-2ST005 図18-1



87

10-2ST005 図18-2

PL 25
宮ノ本14次



88

第14次調査区全景（北西から撮影）



89

第14次調査区全景（北東から撮影）



90

第14次調査区全景（南西から撮影）



91

第14次調査区南西壁東側土層観察（北東から撮影）

PL 27
宮ノ本14次



92
第14次調査区南西壁中央東側土層観察（北東から撮影）



93
第14次調査区南西壁中央西側土層観察（北東から撮影）

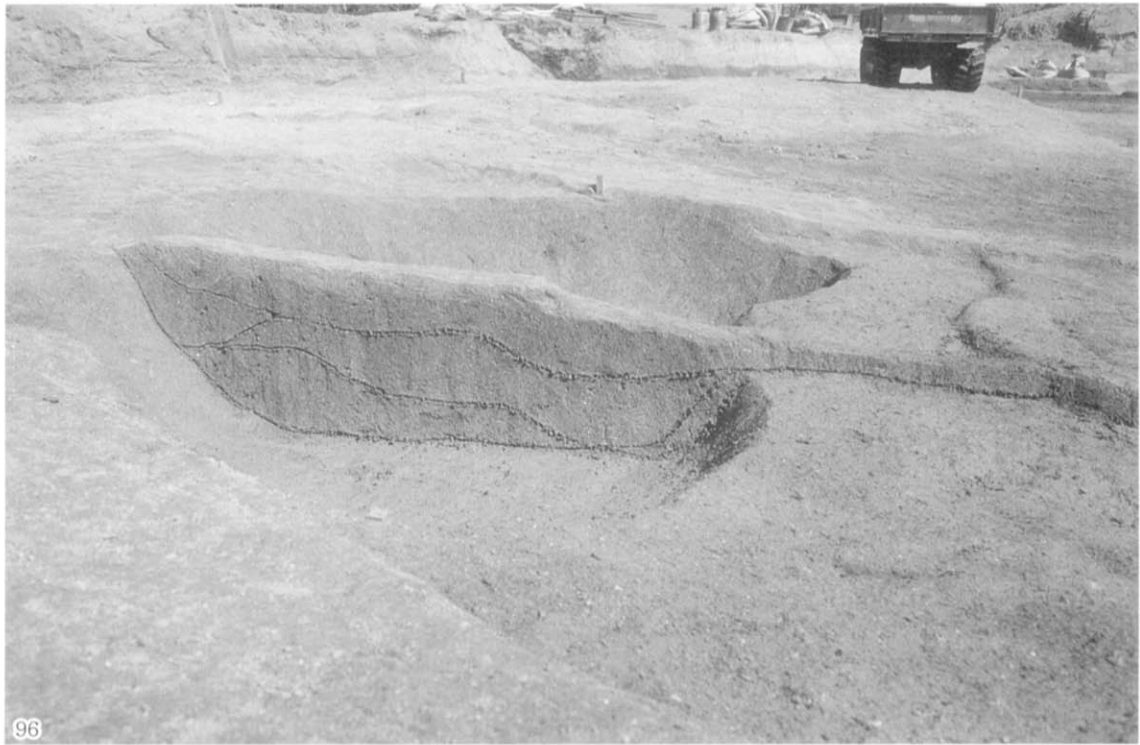


94
第14次調査区南西壁西側土層観察（北東から撮影）



95
14SD009土層観察（南から撮影）

PL 29
宮ノ本14次



96

14SK005土層観察（東から撮影）



97

14SK008土層観察（北西から撮影）



14SK008完掘状況（北東から撮影）



14SK012完掘状況（東から撮影）

報告書抄録

ふりがな	だざいふさのちくいせきぐん
書名	太宰府・佐野地区遺跡群 17
副書名	第10・10-2・14次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	72集
編著者	城戸康利、中島恒次郎、井上信正、山村信榮
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2004（平成16）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第10次	太宰府市 おおあざむかいざの 大字向佐野	402214	210091-10	55690.0	-46750.0	19970908	19971017	261	区画整理
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第10-2次	太宰府市 おおあざむかいざの 大字向佐野	402214	210091-10-2	55690.0	-46720.0	19980420	19980630	1915	区画整理
みやのもといせき 宮ノ本遺跡 第14次	太宰府市 おおあざむかいざの 大字向佐野	402214	210091-14	55780.0	-46550.0	19980911	19981104	247.5	区画整理

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
宮ノ本遺跡 第10次	集落・墳墓跡	弥生～平安	住居跡、火葬墓、土坑墓	土師器 須恵器 陶磁器	大宰府関連の墳墓
宮ノ本遺跡 第10-2次	集落・墳墓跡	弥生～平安 近世～	住居跡、火葬墓 土葬墓	土師器 須恵器 陶磁器	大宰府関連の墳墓
宮ノ本遺跡 第14次	集落跡	弥生～中世	土坑、溝	土師器 陶磁器 石器	

太宰府市の文化財 第72集
太宰府・佐野地区遺跡群 17
 ー宮ノ本遺跡第10・10-2・14次調査ー

平成16年3月

編集発行 太宰府市教育委員会
 〒818-0198
 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 株式会社 三光
 〒812-0015
 福岡県福岡市博多区山王1丁目14-4